

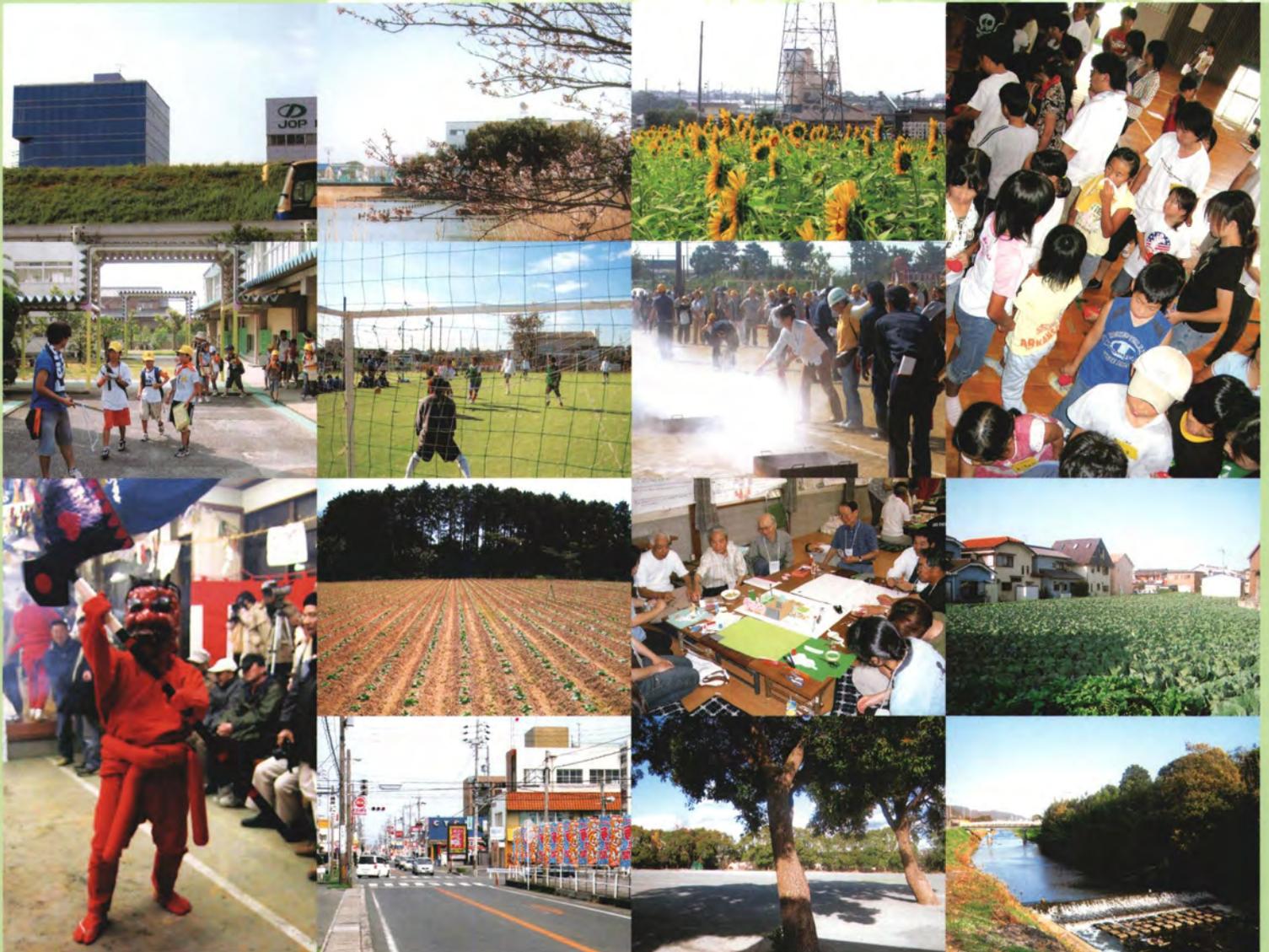
校区のあゆみ

幸

豊橋校区史

42

Miyuki









後列左から 伴鬼、山見鬼、禰鬼、黒鬼。
中列左から 青鬼、獅子、赤鬼。
前列左から 伴鬼、伴鬼。
その他 茂吉、おかめ、すりこぎ、おきななどの面などがある。

花祭りは奥三河地方に伝承されている霜月神楽で700年以上もの間受け継がれてきた祭りです。昭和31年1月18日は、この地、御幸神社で花祭りが始まった記念すべき日です。

第二次大戦後、幸校区の多くが開拓地として提供され、豊根村などからの人々に移り住みました。このような中、佐久間ダムの建設で水没する豊根村分地地区から花祭り祭具一式を譲り受けて始まったのが、この花祭りの起源です。今では、その子孫や住民が幸校区の文化財として引き継いでいます。

サクラ



メジロ



チョウトンボ



ツツジ



シロツメクサ



オオイヌノフグリ



レンゲ



スイセン

ツユクサ



ギンヤンマ



ノアザミ



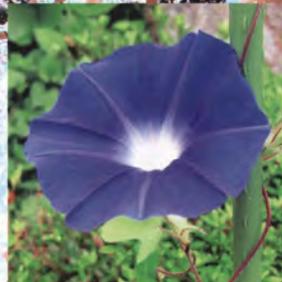
アブラゼミ



ユリ



ヒマワリ



アサガオ



オシロイバナ

モミジ



モズ



サザンカ



ケリ



キンモクセイ



キク



ヒガンバナ



オナガカモ

発刊によせて



平成18年度
豊橋市総代会長

西 義 雄

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業にすばらしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思います。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が多様な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものに終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。



平成18年度
幸校区総代会長

高 木 繁

幸校区が昭和52年4月に市内43番目の校区として発足し、本年で30周年を迎えます。これが偶然にも市制施行100周年と重なります。不思議な気がしますが、校区創立30周年と市制施行100周年を同時に祝うことのできる喜びを感じます。

軍隊の演習地として、戦時中使われていたこの高師原台地が戦後開拓され、農地に変わっていきました。やがて、本市の激しい都市化の波の中で市街化区域となり、新興住宅地へと大きく変貌してきたのです。そして高師原の多くが住宅に生まれ変わり、人口は急増の一途をたどっていきました。

30周年を迎えた現在は、活力ある市街地へと変貌し、市内でも居住人口がトップクラスの大きな校区になっています。

これからも安全・安心で住みよいまちづくりを、校区民が力を合わせて、主体的に実践していくことが重要だと考えています。

今後、様々な場面での参加を期待しています。

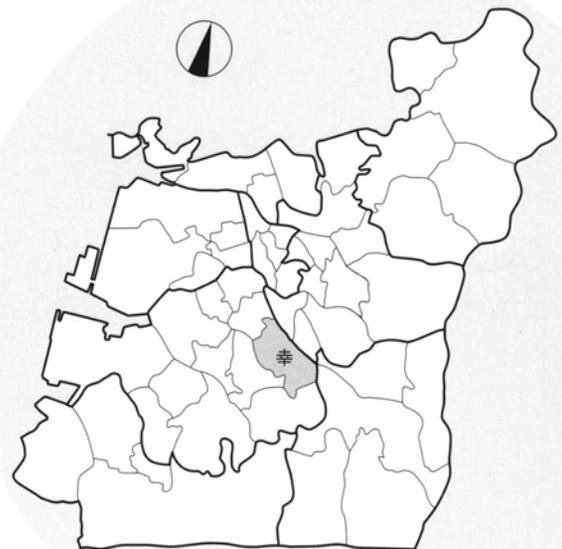
市制施行100周年及び校区創立30周年の記念事業の一環として、この校区史「みゆき」を刊行でき、式典とともに多くの事業を行うことができました。多大なご協力をいただきました多くの方々に厚くお礼申し上げます。

目次

CONTENTS

第1章 自然と環境	7	3 農業のようす	33
第1節 位置・土地	7	(1) 幸校区の農業	
1 幸校区の位置	7	(2) 地区ごとの農業の特色	
2 地形と地質	8	(3) 今後の農業	
(1) 幸校区の地形		4 工業のようす	35
(2) 幸校区の地質		(1) 幸校区の工業	
(3) 貴重な文化財「高師小僧」		(2) 豊橋リサーチパーク	
第2節 自然と生き物	10	5 商業のようすとその他のサービス機関	38
1 幸校区の自然	10	(1) 幸校区の卸売業、小売業	
(1) 幸校区で見られる野鳥		(2) 幸校区の飲食店	
(2) 清水池、天皇池などの水辺の生き物		(3) その他のサービス機関	
(3) 昔の植生		第3章 教育と文化	41
(4) 現在の植生		第1節 学校教育・保育	41
2 幸校区の水辺	15	1 保育園、幼稚園	41
(1) 梅田川の移り変わり		(1) あゆみ	
(2) 泉が湧き出していた清水池		(2) 高師東保育園	
(3) よりよい川をめざして“水無川”		(3) こばと幼稚園	
(4) こまどり保育園		2 幸小学校	43
第2章 歴史と生活	17	(1) あゆみ	
第1節 幸校区のあゆみ	17	(2) 教育目標	
1 郷土の昔をたずねて	17	(3) 学校の状況	
(1) 遺跡は語る		3 高師台中学校	45
(2) 狩人たちの住む里		(1) あゆみ	
(3) 米づくりを始めた狩人たち		(2) 教育目標	
(4) 郷土に古墳文化が伝わる		(3) 学校の状況	
(5) 焼きものの里		第2節 史跡や文化財	46
(6) 歌や紀行文に見る郷土の昔		1 幸校区の史跡	46
2 江戸時代の郷土のようす	21	(1) 4つの碑	
(1) 藤並新田の開発		(2) 様々な史跡	
(2) 高足村の人々のくらし		2 幸校区の文化財	48
(3) たかしの地名の由来		(1) 神社と祭り	
3 軍都・豊橋と高師原	22	(2) 各神社の鎮座地	
(1) 明治のころの高師原		編集後記	52
(2) 大正のころの高師原			
(3) 昭和の高師原			
4 高師原の開拓	24		
(1) 開拓が始まる			
(2) 開拓の苦労			
(3) 実った努力			
(4) 農業を変えた豊川用水			
第2節 発展する幸校区	28		
1 市街化の波	28		
(1) 人口の推移			
(2) 市街化された高師原			
(3) 町名と字名の成立			
(4) 町名と字名の由来			
2 交通のようす	31		
(1) 道路のようす			
(2) 道路の歴史			
(3) バス路線のようす			
(4) これからの交通環境			

校区の位置



第1章 自然と環境

第1節 位置・土地

1 幸校区の位置

私たちの住む東三河地域を地図で見てみよう。渥美半島が太平洋に突き出し、そのため三河湾が半島の北側に形成されている。渥美半島から北東側には弓張山地が延びており、この山地は北に向かうにつれて次第に標高を増し、最終的には標高3,000m級の山々から成る赤石山脈へとつながってゆく。豊橋市を見てみると、西は三河湾、南は太平洋に面し、東は弓張山地に接している。多様な地形を有し、自然環境が豊かであることから、工業や

農業が非常に盛んな地域となっている。

さらに細かく私たちの住む地域を見てみよう。私たちの住む幸校区は豊橋市の南東部に位置し、南に梅田川が流れ、北東部をJR東海道線が通っている。幸校区のほとんどが高師原台地上にあり、かつては大規模な陸軍演習場として利用されていた。現在では、幸校区を含むこの市内南東部は学術施設の充実した地域となり、科学研究の拠点として位置付けられている。幸校区内ではサイエンスコアを中心とした豊橋リサーチパークが建設され、産学交流・研究開発の場となっている。

また、周辺校区には国立大学法人豊橋技術科学大学や豊橋動植物公園、視聴覚教育セン



平成18年、幸校区創設30周年の節目の年、幸校区の“まちなようす”がわかる巨大地図「ガリバーマップ」(横8.4m×縦4.5m)を幸小学校、PTA、校区で作成しました。

ター、地下資源館などがあり、数多くの調査・研究が行われている。

交通面では、山田町の諏訪神社から牧野町や江島町を通る都市計画道路山田原線が開通し、市中心部へのアクセスが格段に良くなった。人口も着実に増加しており、今後益々の発展が予想される。

2 地形と地質

(1) 幸校区の地形

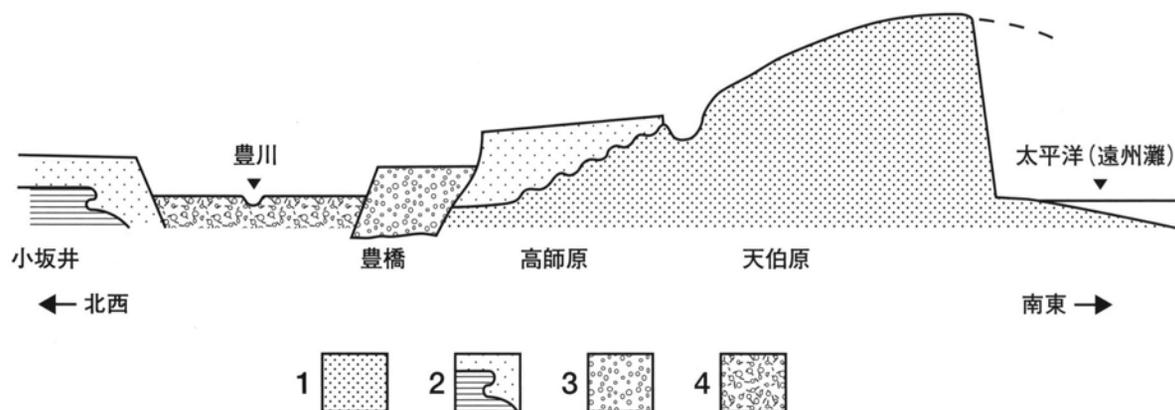
幸校区は、その大部分が柳生川と梅田川に挟まれた高師原台地上に存在する。また、梅田川以南の天伯校区から海岸線までは天伯原台地が広がっている。ここでは、この2つの台地を比較しながら幸校区の地形についてまとめてみよう。まずそれぞれの台地の高さであるが、天伯原台地が海拔80m（台地南部）～30m（台地北西部）であるのに対し、高師原台地は東部で一部海拔30mを超えるものの、それ以外は海拔30m以下で、西および北

に向かって次第に低くなっている。つまり、高師原台地の方が天伯原台地よりも低い位置に形成されている。

さらに、両台地の平坦面を見てみると、天伯原面は風雨による侵食が進んで丘陵化しており、堆積当時の原面をほとんど留めていないのに対し、高師原面はさほど侵食されておらず平坦面が保存されている。これは、台地の形成時期の違いによるもので、高師原台地の方が形成時期が遅かったからである。

また、両台地の間には梅田川に沿って海拔数mの低地が形成されている。幸校区の南部もこれに属している。

以上のことから、幸校区の地形は牧野町から西幸町浜池付近まで南に行くにつれて緩やかな上り坂で、そこから梅田川に向かって急な下り坂となっており、東三河環状線から梅田川にかけてはほぼ平坦な低地となっている。



渥美半島から豊川にかけて模式地層断面図

1. 渥美層群 2. 高師原層群 3. 豊橋層群 4. 沖積層

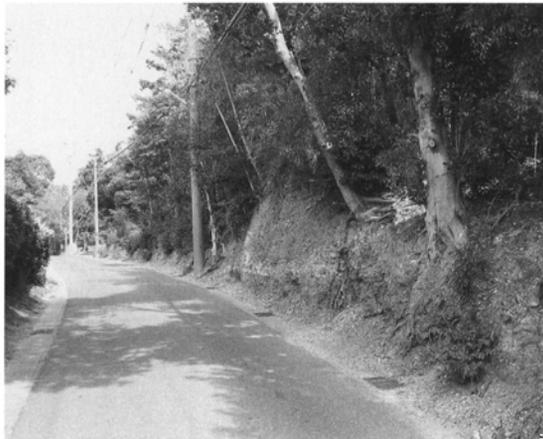
出典：豊橋市自然環境保全基礎調査報告書

(2) 幸校区の地質

豊橋市は、主に山地を構成する秩父累帯の地層（中生代）と、平野部を構成する洪積層（新生代第四紀更新世）から成っている。幸校区の大部分を占める高師原台地の地質を大まかにまとめると、中生層を基盤岩として、その上に更新世中期の渥美層群が分布し、さらに更新世後期の高師原礫層が覆っている。また、梅田川沿いには完新世にできた沖積層が分布している。

渥美層群は、礫層・砂礫層・砂層・シルト層及びその混合層から成っている。これらは河川によって上流から運ばれ堆積したもので、各層の粒子サイズが異なるのは、時代によって気候が変動し海域が変化したからである。温暖な時代には海面が上昇し、海水が陸地に入り込み、逆に寒冷な時代には陸の彼方に退いたことで、堆積物の粒子サイズが変動した。

また、校区内の切り通しや崖に見られる礫などから、この周辺の堆積物は豊川によって供給されたものと、天竜川によって供給されたものの両者が含まれていることがわかる。前者は珪岩や片麻岩、扁平な火山岩礫から成り、サイズは大から中礫のものが多く、後者は火山岩のよく円磨された礫を主とし、砂岩礫を含んだ中礫が多いのが特徴である。



藤並町に残る切り通し

(3) 貴重な文化財「高師小僧」

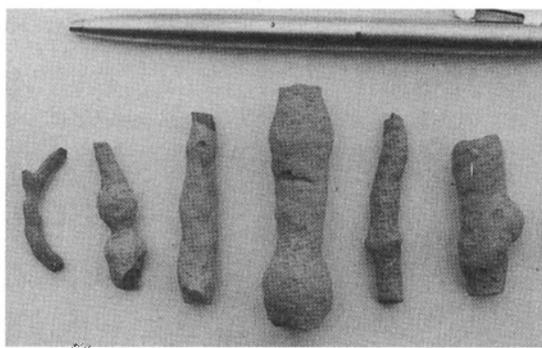
幸小学校や高師台地区市民館、地下資源館などに大小さまざまな高師小僧が展示してあるので、みなさんはその姿をご存知であろう。

高師小僧は褐鉄鉱という鉱物で、作られた時期は数万年から数十万年前と言われている。

その作られ方は、地中の鉄分が植物の根や地下茎の周りについて固まったもので、固まり方には微生物の活動による生成、植物根の吸着による生成、鉄分の沈着による生成などが成因として考えられている。形は、芯となる植物の根が腐って穴の開いた管状のものや樹脂状、板状、球状のものときまぎらで、大きさも通常は直径2～5cm、長さ1～10cmだが、大きいものでは直径30cm以上にもなる。

現在は住宅地や農地が増えたため、ほとんど見つけることができなくなったが、高師台中学校校庭の南側一部と浜池公園が県の天然記念物指定地となっており、大切に保存されている。

ところで、「高師小僧」というユニークな名前であるが、降雨後、土が流されて地上に露出した様子が幼児や動物のようであったことからそう呼ばれたと言われている。また、高師小僧は昔「管石（クダイシ）」とも言われ、隣接する高師校区浜道町には字名「管石（カンセキ）」として現在でも残っており、かつてこの地域一帯で多くの高師小僧が産出されたことがうかがえる。



高師小僧

第2節 自然と生き物

1 幸校区の自然

(1) 幸校区で見られる野鳥

幸校区では住宅地と畑が混在している。それゆえ、野鳥たちにとっては、あまりよい環境とは言えない。どんな野鳥たちがいるか、その数が多いかなどは、その地域の地形や植生・土地利用、そして季節などに影響される。だから、幸校区には住宅地や畑や田んぼにいる野鳥と、清水池や梅田川のような水辺にいる野鳥とが住み分けており、季節によっても違う野鳥がいる。

季節によってほとんど移動しない「留鳥」、狭い地域の中を季節によって移動する「漂鳥」、その地域に春に南からやって来て秋に南に渡っていく「夏鳥」、その地域より北や高地で夏を過ごし、冬にその地域で過ごす「冬鳥」などに区別される。住宅地には、人と共存している留鳥のスズメがいる。家がない山野にはスズメはいない。屋敷の裏藪などから大きな声で「チョットコイ、チョットコイ」と鳴くのはコジュケイである。

春に南の国からやって来て軒先きなどでヒナを育てるのが、夏鳥の代表・ツバメ。最近このツバメが増えている。昔は農家の土間に巣を架けていたが、最近のツバメは車庫の蛍光灯や軒先きの電灯の上にも巣を架ける。

冬は家の庭などに居て、春になると「ホーホケキョ」とさえずり山でヒナを育てるのがウグイス。昔は山に居て「山鳩」と呼ばれていたキジバトも、ドバトと同じ環境で暮らしている。



キジバト

畑や水田でよく見かけるのが、留鳥のヒヨドリとムクドリで、野菜をつつくと農家から嫌われる。冬が近づくと、冬鳥のツグミ、タゲリ、タシギ、夏鳥のアマサギやチュウサギ、



ヒヨドリ



ムクドリ

留鳥のタマシギ、バン、キジ、ケリ、ヒバリ、漂鳥のモズを見つけることができる。

上空を見上げると「ヒーイヒョロロ」と鳴きながら輪を描く、猛禽類のトビがいる。冬には、羽の下面が白いノスリもよく見ることができる。



コサギ

畑や水田によくいるカラスはハシボソガラス。ゴミなどをあさっているカラスはハシブトガラス。

アシなどの丈の長い草が生い茂っている河畔や休耕田などには、留鳥のカワラヒワ、セッカ、ホオジロ、夏鳥のオオヨシキリなどがいる。

池・川には、留鳥のカイツブリやカワウ、カルガモ、イソシギ、コサギ、ダイサギ、カワセミ、キセキレイ、セグロセキレイ、冬鳥のハクセキレイやヒドリガモ、ユリカモメなどが観察できる。また、天皇池などの水辺には、冬、オナガガモ、カルガモ、コガモなどカモの仲間が見られる。



キセキレイ

(2) 清水池、天皇池などの水辺の生き物

清水池は、少し前まで生物の宝庫であった。ホテイアオイが水面を覆っていて、水質も比較的よかった。しかし、開発が進み汚れた水質環境に生き物は少なくなってきた。そこで、環境整備を行うとともに幸小学校の児童は清水池調査やゴミ拾いを行い、水辺の生き物の場を確保するため努力をしてきた。

平成11年度から平成13年度の調査では、水辺の動物として魚では、モロコ、フナ、コイ、ドジョウ、ブラックバス、ザリガニなど、野鳥では、コサギ、アオサギ、シラサギ、カルガモなどを観察している。昆虫もオオシオカラトンボ、アメイトンボ、ネキトンボ、フタスジサナエやアオスジアゲハなど水辺を好む種類を確認している。水辺の植物としては、ガマ、ヨシを筆頭にツユクサ、ノゲシ、ハナイカダ、チカラシバ、キソエノコロ、イヌタデ、トキワススキ、ハチジョウススキなどの存在を調べている。現在でも小学生が一生懸命、調査や保護活動をしており、様々な野鳥や昆虫などが見られる。少雨化傾向で水量の少ない近年の清水池には、冬のカモ類をはじめ生き物が少なくなっていることが心配でもある。水辺環境整備を行ったころの環境を保っていきたいと、今年も児童会活動や総合的学習の時間の中で幸小学校での調査・保護活動は続いている。

清水池より自然度の高い天皇池では、現在も池の大半をヨシなどが水面を覆うように群生している。ヨシはトンボにとって絶好のすみかとなっている。チョウトンボ、ショウジョウトンボ、キイトンボ、ウスバキトンボなどが見られ、ギンヤンマも発見できるようである。

自然の多い水辺はヘビなどもいるが、小さな昆虫から両生類、魚類、鳥類など様々な生態が見られる。最近では生態系の豊富なピオ

トープをつくる学校も見られるようになったが、幸小学校には清水池が昔からあるので、この池をピオトープとして大切にしていくと、様々な体験や生きた学習が期待できる。

幸校区の南には梅田川が流れているが、ここにも多くの生き物たちがいる。川にはコイのおよぐ姿が見られる。モロコやフナもいるが、夏にはアユものぼるそうだ。川辺にはカエル、ヘビをはじめ様々な生き物がいて、それらを狙うサギ類、カワウなど弱肉強食の世界をつくっている。



小学生の自然観察、530運動



ヨシなどが水面を覆う天皇池

(3) 昔の植生

みなさんは、普段何気なく目にしている植物の名前を知っているだろうか。またそれらはどのような特徴を持っているか分かるだろうか。ここでは、みなさんがよく目にする植物に着目してみよう。

幸校区の大部分を占める高師原台地は、もともと土地がやせ、乾燥していた。さらに、戦時中は陸軍演習場として利用されていたため、戦車や人馬などが頻繁に往来し、植物が生育するにはかなり厳しい環境であった。そのため悪条件でもある程度耐えられる植物、樹木ではクロマツ、草本ではネザサやチガヤ、ススキなどが分布していた。

クロマツ

常緑針葉樹。耐寒性、耐潮性があるため海岸で多く見られる。アカマツとの区別は葉及び樹皮で、クロマツのほうが長い葉を持ち、樹皮が暗黒色である。

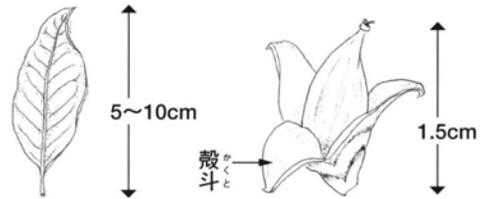


一方、藤並や高田、牧野といった昔から集落が形成されていた地域では、西南日本の低地に特徴的なシイやカシなどの常緑広葉樹から成る照葉樹林のほか、コナラやアベマキを主とした雑木林が見られた。また、清水池や天皇池などの湿地には、水生植物を含む多くの植物が生育していた。

◎シイ、ウバメカシ、コナラの見分け方

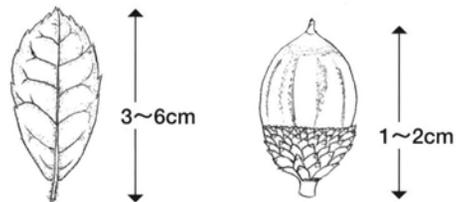
すべて暖地に自生する広葉樹だが、シイとウバメカシは常緑樹で、コナラは落葉樹である。見分けやすいのは葉の形で、それぞれ下図のように異なる。また、これらは全てブナ科の植物で、どれも堅果と呼ばれる実（ドングリ）をつける。ちなみに、クリもこれらと同じブナ科の植物である。

シイ



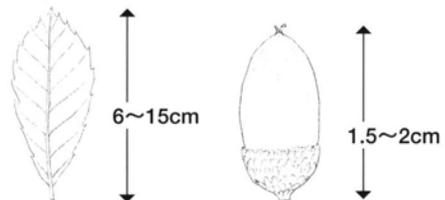
- ・葉の裏側は薄い褐色でりん毛が密に生えている
- ・実は細長で全体が殻斗かくとで包まれている

ウバメカシ



- ・葉の両端は丸く、上半分にきょ歯がある
- ・実は卵形で、花が咲いた翌年の秋に熟す

コナラ



- ・葉は先がとがり、荒いきょ歯がある
- ・実は楕円形で、花が咲いた年の秋に熟す



記号	樹木の種類	記号	樹木の種類
1	イヌマキ	13	ミズナラ
2	ウバメガシ	14	スギ
3	オニグルミ	15	ヒノキ
4	カシ	16	サクラ (群)
5	クスノキ (群)	17	モミノキ
6	クロマツ (群)	18	サカキ
7	ケヤキ (群)	19	タケ
8	アカマツ (群)	20	センダン
9	ヤマモモ	21	エノキ
10	シイノキ	22	ツバキ
11	ヤナギ	23	カシワ
12	モチ	24	キョウチクトウ

(4) 現在の植生

① 樹木と緑被率

上の図は、幸校区内で目につく樹木の分布図である。戦後、開拓が行われた幸校区には、樹齢数百年といった古木はほとんど残っていないが、神社や昔から人の住んでいる屋敷の林には、西南日本に特徴的な樹木がいくつか見られる。その中でも特に巨木と呼ばれるものは、牧野神社、進雄神社（藤並町）、御幸神社、スポーツ広場（と畜場跡地）に生育するクスノキや、清水池、御幸墓地のクロマツ、藤並町、江島町の個人宅に残るスダジイなどが挙げられる。これらのほとんどが樹齢百年以上である。

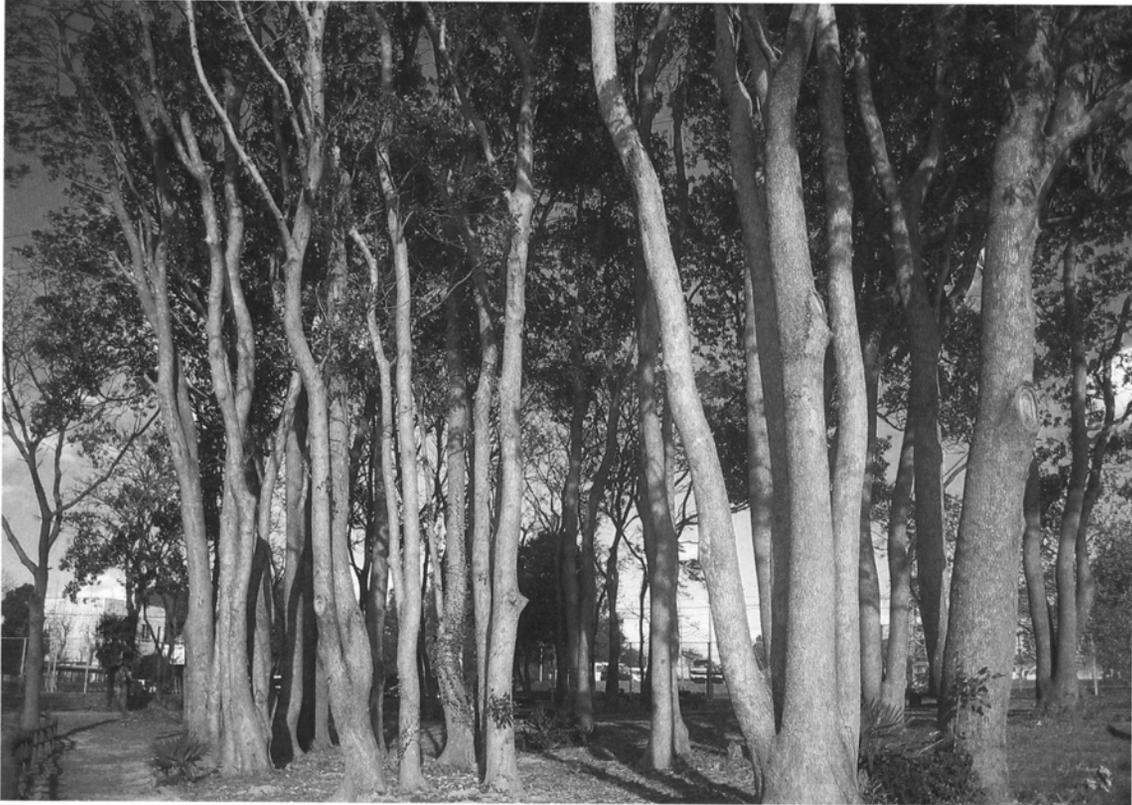
上記のほかに、現在幸校区には様々な樹木が見られる。そのほとんどが戦後、人々の手によって植樹されたものである。開拓で移り住んだ人々が庭木として多種多様な樹木を植え、荒地であった高師原台地が少しずつ緑の地へと変化してきた。

緑の量を表す単位に緑被率がある。樹木、芝、草花など植物によって覆われた部分の土地の面積率を言うが、樹木の量がその中心である。幸校区の場合、陸軍演習場、そして開拓地であったために緑被率はきわめて小さく

なっているが、わずかに高師原台地の南の端にあたる東三河環状線の北側に防風林の役割も持つ固まりとしてわずかに残されている。また、鎮守の森なども緑被率向上の役割を果たし御幸神社、進雄神社などに緑の量が多い。

そのほか、近年整備された公園や街路樹がその役割を担うことになるが、幸校区内の公園などには、高師台中学校南の玲瓏の森（残念ながら一般公開されていない）、スポーツ広場を除き、比較的大きな面積で緑の量を持つ公園は極めて少ない。街路樹では、幅員のある幹線道路がなかったこともあり、大きく成長しつつある山田原線のケヤキ並木のみが目につく。ほかには、弥生町線のハナミズキが近年植樹されるにとどまり、線としての緑の帯は短い。市民参加型緑化事業の好例として、水無川コミュニティ道路がある。道路整備にあたり地域の住民が樹種を決め、ハナミズキ、イチョウ、トウカエデなどが植えられた。

緑化による大きな木陰は、夏の日差しをさえぎり、四季を感じさせ、人々の気持ちをいやすばかりか、地球温暖化を防ぐ最も身近な取り組みの一つである。さらに近年、環境学



高師台中学校南の玲瓏の森

習が重視され始めている。子どもたちが、まちの中の自然とふれあい、自然を大切にするまちづくりの場とするためにも、今ある民地の木々を含め、緑の量を確保していくことが大切である。

今後は、社寺林などの民地の緑を大切にするとともに緑あふれる公園や街路を校区民の参加により増やし、その管理についても自分たちのまちづくりとして協力していくことが重要で、地域と行政の協働により木々を大切に育て、自然豊かで感動を生むまちにしていきたいものである。

②草花（草本）

戦後、人々が移り住み土地が開拓されてからは、土壌環境が改善され、肥沃化したことで植生も大きく変化した。現在では、農地での雑草被害や、帰化植物の侵入による在来植物の減少などが問題となっている。

ア) 水田や畑地、あぜ道などで見られる雑草

水田の雑草	一年生雑草	タイヌビエ・カヤツリグサ・ヒデリコ・アゼナ・コナギ
	多年生雑草	スズメノヒエ・マツバイ・ミズカヤツリ・オモダカ
	水面浮遊雑草	ウキクサ・サンショウモ
	モ類	アオミドロ・アミミドロ
畑地の雑草	一年生雑草	メヒシバ・オヒシバ・スズメノテッポウ・カヤツリグサ・スベリヒユ・アカザ・ハコベ
	多年生雑草	チガヤ・チカラグサ・ヨモギ・カタバミ・ギシギシ
	シダ類	スギナ

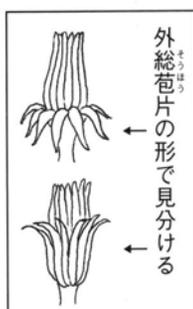
※一年生雑草：種子により1年サイクルで繁殖する。
 多年生雑草：地下茎などでも繁殖することが可能。

イ) 帰化植物

帰化植物とは、人間の手によって外国から日本に持ち込まれた植物で、繁殖力が強く日本の在来植物の生育を妨げてしまう。

・セイヨウタンポポ (右図上)

ヨーロッパ原産で明治時代に日本へ帰化した。豊橋では、かつてトウカイタンポポ (右図下) やシロバナタンポポなどが見られたが、現在、数が激減している。



・セイトカアワダチソウ

北アメリカ原産で戦後激増した。地下茎で繁殖できるため、刈り取ると益々増えてしまう。

※その他、オオイヌノフグリ、シマスズメノビエなどが帰化植物の代表である。

ウ) 花の美しい草花

幸校区では、土地の住宅化により植物の種類や絶対数が一時期より減少したものの、まだ身の周りには美しい花をつける草花が自生している。

〈春〉・スミレ：日本には非常に多くの野生種があり、日当たりの良い石垣の裾などに濃い紫、青、白などの色の花を咲かせる。

・シロツメクサ：四葉のクローバーで有名であるが、通常三葉で、まれに四葉や五葉になる。帰化植物で、ヨーロッパ原産である。牧草としても利用されている。

〈夏〉・タカサゴユリ：台湾原産の帰化植物で、日当たりのよい場所に生える。ユリ科の植物には珍しく、あまり強い香りはしない。

・ツククサ：茎を長く伸ばし、節から根を出すので地面を覆うほど茂ることができる。青い2枚の花びらから成る独特の花をつける。

〈秋〉・ヒガンバナ：気温が18~20度になると開花するため、毎年秋の彼岸頃に花をつける。中国原産で非常に古く日本に入ってきた帰化植物である。球根には毒性物質を含むが、薬効もあるとされている。

〈その他の主な草花〉

春	ノゲシ・ノアザミ・ハハコグサ・ハルジオン・ホトケノザ・レンゲソウ
夏	ワルナスビ・ヒルガオ・ドクダミ
秋	イヌタデ・ミソハギ・ノコンギク

2 幸校区の水辺

(1) 梅田川の移り変わり

幸校区の南部を流れる梅田川は、豊橋市雲谷町に流れを発する半尻川が、一旦隣接する静岡県湖西市の梅田を流れて梅田川と改称した後、再び豊橋市に入って市内を東から西に横断し、最終的には三河湾へと流れ込んでいく。総延長14km、流域面積86.6km²の二級河川である。

河口付近は近世の初頭までは海が深く湾入していたが、川の堆積作用で次第に浅くなり、1600年ごろから新田の開発が進んだ。

戦後、高度経済成長に伴って梅田川流域は工業化・住宅化が進み、それによって水質汚濁が問題視され始めた。そのため昭和50年代には廃水の規制が始まり、昭和60年代からは梅田川水質改善のためのさまざまな事業が開始され、現在は当時よりも水質が改善している。

かつて梅田川にはウナギが住み、水面にはホタルが舞う美しい川であった。昔の梅田川の姿を取り戻すためには、今後も絶え間ない努力が必要である。

(2) 泉が湧き出していた清水池

台地上に降った雨は、そこに生えている雑木林や下草の間を流れたり、洪積台地の砂や礫の間にしみこんだりする。その水が湧き出ている所が随所にあった。幸小学校に隣接する清水池もその一つである。洪積台地はやせた土地であり、池に流れ込む雨水や地下水も肥料分がほとんどなく、とてもきれいな水であった。そこには、東海の尾瀬といわれている現在の葦毛湿原に生育しているような植物が群生していた。開発が進み、生活排水が流れ込むようになって、シラタマホシクサ、ミミカキグサなどは死滅した。ヘラブナやメダカやヤゴなども種類が減って、釣りを楽しむ子どもでいっぱいだった光景は見られなくなった。

これではいけないと地域・学校・市役所が立ち上がり、平成13年から3年間かけて水辺の環境整備を行い、幸校区の自然財産として大切に守っていくこととなった。



幸小学校創設当時の清水池

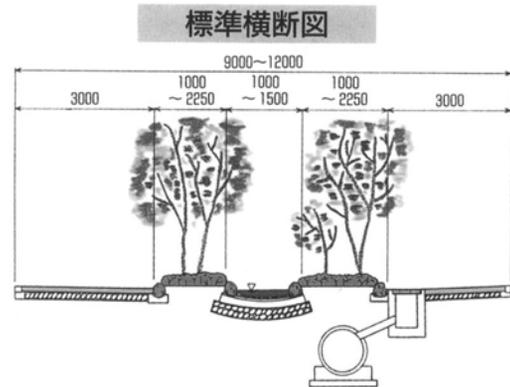


昔の水無川

(3) よりよい川をめざして“水無川”

水無川は、清水池を源として西に流下し、市道弥生町・畑ヶ田町49号線に架けられた弥生町の豊栄橋で二級河川内張川に合流する普通河川である。

水源の清水池は農業用のため池だが、川沿いは、市街地区域となり、普段はその名前のおり水の無い川で、雨天時に出水する典型的な都市型河川となっていた。また、護岸部は生活道路として利用されていた。そこで、地下に排水管を設けて排水機能を充実するとともに、地上部分に小川と植栽を設けた親水コミュニティ道路を作った。歩行者中心に考え、地域の人々の通学・通勤・散歩のために景観アップも考えて整備したのである。



水無川「親水コミュニティ道路」の断面



せせらぎ緑道

第2章 歴史と生活

第1節 幸校区のあゆみ

1 郷土の昔をたずねて

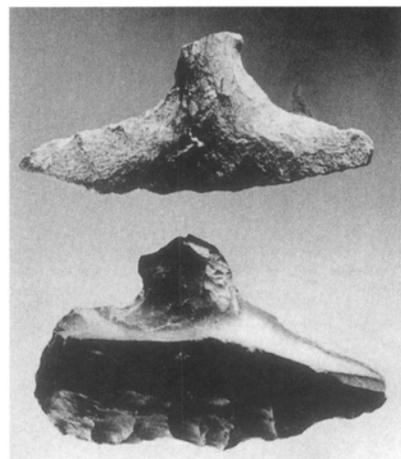
(1) 遺跡は語る

幸校区の歴史は、比較的新しい。しかし、校区を高師原や梅田川流域、さらに天伯原にまで広げてみると、そこには古い歴史がある。図1の資料に見るように、梅田川をはさんで広がる高師・天伯原には、数多くの古代の遺跡が点在し、発掘され、記録されている。これらの遺跡群は、大昔、この地域に住みついていた人々がいたことの何よりの証拠である。この先人が残した遺跡とそこから出土した石器や土器などは、私たちに郷土の昔のようすを語り伝えてくれるものである。

(2) 狩人たちの住む里

梅田川兩岸の高師・天伯原の各地からは、表1の資料が示すように、先史時代（縄文から弥生時代）の石器や土器が発見されている。石器には、矢じり、皮はぎなどがある。

このことから、ここに住んだ人々は、高師・天伯原の森でけものや鳥をとらえたり、また、木の実や草の根を採集したりしてくらす狩人たちであったと考えられる。また、網などの遺物は残っていないが、三河湾の入江が深くこの地にまでおよんでいたもので、狩人たちは、入江や川で魚や貝などをとる漁もしきりに行っていたことだろう。大昔の高師・天伯原台地は、森が茂り、海や川に近く、狩りや採集や漁をしてくらす狩人たちにとって、絶好のすみかであったと想像できる。



石の皮はぎ（大穴池西畑出土）



石鏃（測点高地出土）

(3) 米づくりを始めた狩人たち

梅田川の流域で発見された土器を調べてみると、その中には、ものを貯えるのに使ったと思われるつぼ、煮たきに使ったと思われるかめ、盛りつけておそなえするのに使ったと思われる高坏などがある。石器の中にも稲穂を切りとるのに使ったと思われる石包丁がある。このことは、長い間狩りや漁で生活してきたこのあたりの人々が、弥生時代の後半のころから米づくりを学び、川辺の湿地や沼地を水田として開き、農業を始めたことを物語っている。

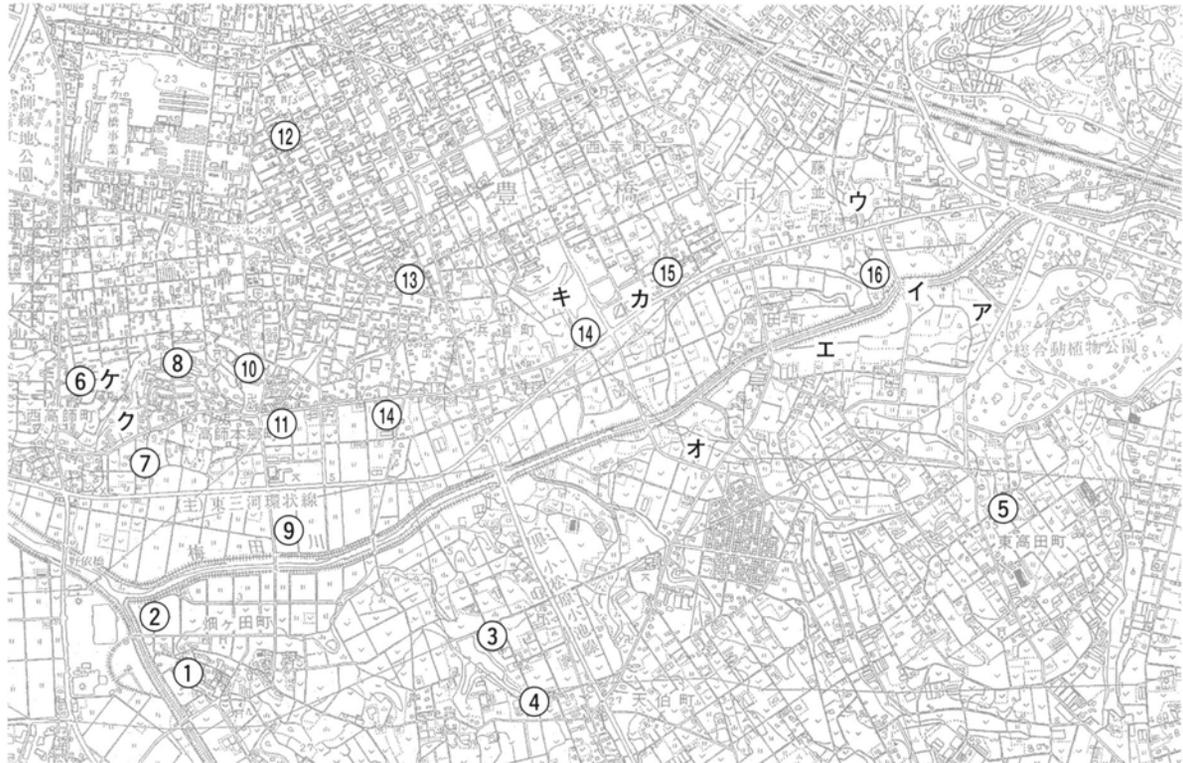


図1 遺跡・遺物表および梅田川両岸地域に分布する古窯址群（高師風土記より）

No.	遺跡地	出土遺物	時代	No.	遺跡地	出土遺物	時代
①	野依町仏餉	土器	縄文	⑨	高師本郷町上分	石器・土器	縄文～弥生
②	畑ヶ田町落合	石器・土器	弥生	⑩	高師本郷町榎	石核	先土器
③	天伯町(大穴池)	石器・石鏃	先土器・縄文	⑪	高師本郷町竹ノ内	石鏃	縄文
④	天伯町西天伯	土器	弥生	⑫	曙町若松	石剣	弥生
⑤	東高田町東高田	石鏃	弥生	⑬	曙町測点	石器・土器	縄文
⑥	西高師町小谷	石鏃	縄文～弥生	⑭	浜道町芝切・夏池	石鏃	縄文～弥生
⑦	西高師町津森	土器	弥生	⑮	西幸町古並	石鏃	縄文
⑧	上野町上原	石鏃	縄文	⑯	藤並町相生	石鏃	縄文

No. 古窯址群			
ア	藤並・大沢古窯址	イ	藤並・八反田古窯址
ウ	藤並・天王古窯址	エ	高田・高田古窯址
オ	天伯・天伯古窯址	カ	西幸・古並古窯址
キ	浜道・百々池古窯址	ク	西高師・津森古窯址
ケ	高師・小谷古窯址		

■ 幸校区にあった古窯跡群

表1 遺跡・遺物表および梅田川両岸地域に分布する古窯址群（高師風土記より）

(4) 郷土に古墳文化が伝わる

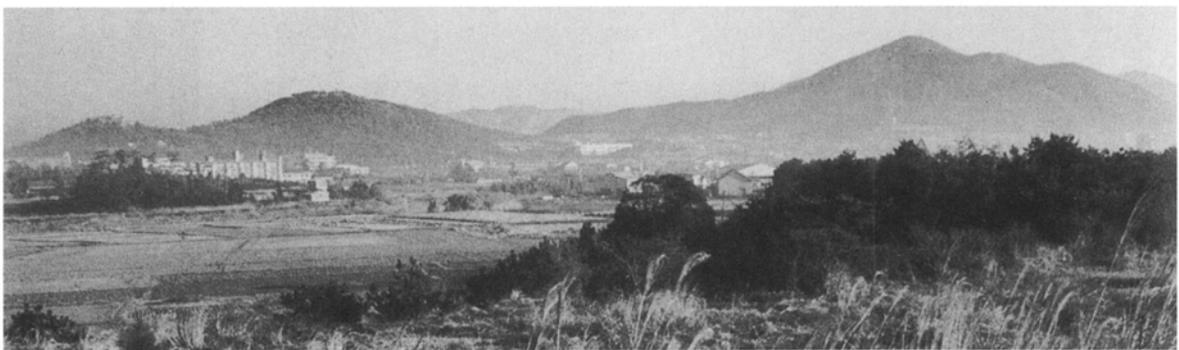
梅田川上流の谷川・二川地区には、大小さまざまな古墳がいくつかあり、また、下流の植田・大崎地区にも古墳がある。中流の高師・天伯地区には、古墳とは断定できないものの、藤並町に三基、天伯町に一基の古墳らしいものがあることがわかっている。

古墳は、その土地の権力者の墓である。このことから梅田川の流域では、稲作を中心とする農業の発達にともない、ムラや多くの土地を従えて力をふるう豪族が生まれてきたことがわかる。

藤並町にある石神は、はたして古墳である



藤並町の石神（高師風土記より）



藤並・八反田古窯址のある森（高師風土記より）



皿（藤並・大沢古窯址周辺で採集）

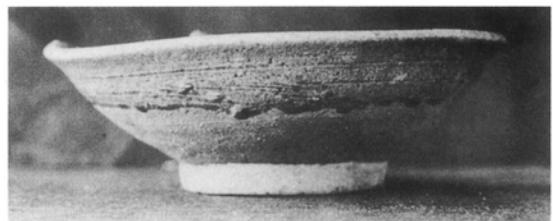
うか。藤並町史（柴田秀夫編）によると直径6メートル、高さ3メートルであったが、今は小さな低い石積みとなって、昔のおもかげをわずかに残している。

(5) 焼きものの里

藤並町大沢で古い窯^{かまあと}址が発見されている。それは、平安時代に瓷器^{しき}という焼きものを焼いた窯であることがわかっている。その窯址の付近からは、すてられた灰とともにたくさんの碗^{わん}や皿、鉢、瓶、かめなどが出土している。

その他に、藤並町八反田や天王池、高田町、西幸町古並などにも古い窯址が多く見つかっている。そして、そこからも碗や皿など平安朝様式の瓷器が見つかっている。

このように、古い窯址や焼きものが見られる。この梅田川の兩岸の地域は、昔は焼きものの里でもあったと言えよう。人々が、農業のかたわら、ねん土をねり、窯に入れて焼くという仕事をあちらこちらの丘で行っていたことが想像できる。また、この地は、良いねん土や豊富な燃料（森の木）に恵まれていたこともうかがい知れよう。



浅い碗（大沢古窯址周辺で採集）

この焼きものの里で焼かれた製品は、舟に積まれ三河湾を通って遠く都へ運ばれたと考えられ、都とのつながりも深かったと思われる。

10世紀の中ごろ、旅の途中、この地を訪れた増基という僧の綴った文の中に、

(たかし山にて、すえつきつくと聞きて)
「ただならぬ たかしの山のすえつくり
もの思ひをぞやくとすと聞かす」

と記されている。おそらく高師山の各所の窯から立ちのぼる火や煙を見て、わびしい旅の一時、感動を覚え、歌に詠んで残したのであろう。

しかし、盛んだった焼きものの生産も12世紀の初めごろにはおとろえ、西の渥美半島方面へと生産地が移っていった。

(6) 歌や紀行文に見る郷土の昔

高師山とよばれて

私たちの郷土、高師原は、平安時代の昔から「たかしの山」とか「高師山」などの名で歌や紀行文などに登場しているが、高師山という特定の山があったのではない。

その高師山というのは、高師原、天伯原の台地と、さらに続く湖西の丘陵地帯を合わせた起伏のあるこの地帯の全体に名づけられた地名であって、この高師山は、平安時代より関東地方と都のある近畿地方を結ぶ主要な通行路（東海道）であり、旅人の往来が盛んなところであった。その道すじははっきりしていないが、豊川の河口、渡津から牟呂を経て高師山を越え大岩山近くを通り、白須賀へ通じていたと考えられている。



- 高師山付近の自然とくらしを詠んだ歌**
- あずま路や今朝立くればせみの声
たかしの山に今ぞ鳴くなる
(仲実朝臣 十二世紀前半)
 - 雲のゐる梢しんげははるかに霧こめて
たかしの山に鹿ぞ鳴くなる
(右大臣実朝 十三世紀半)
 - なおしばし見てこそゆかめ高師山
麓にめぐる浦の松原
(中納言為氏 十三世紀中頃)
 - 浦路よりうちこえくれば高師山
みねまで同じ松風ぞ吹く
(津守国冬 十三世紀後半)
 - 朝かぜにみなとをいづるとも舟は
たかしの山のもみじなりけり
(西行法師 十三世紀末頃)
 - たかし山ゆうこゑはててやすらへば
麓のはまにもしほやくみゆ
(民部卿為家 十三世紀後半)



- 紀行文などに記された高師山**
- 更級日記(菅原孝標の娘・十一世紀中頃)
「まことに松のすえより浪はこゆるやうに見えて、いみじくおもしろし。それよりかみはるのなといふ。坂のえもいわずさびしきをのぼりぬれば、三河の国の高師の浜という。……」
 - 東関紀行(作者不詳・十三世紀前半)
「三河遠江のさかひに、たかしの山と聞きゆるあり。山中に越えかかるほどに谷川のながれ落ちて岩瀬の波のごごとしく聞ゆ。境川といふ。岩つたい駒うちわたす谷川の音もたかしの山にきけり、……」
 - 十六夜日記(阿仏尼・十三世紀後半)
「たかしの山も越えつ。海みゆるほど、いとおもしろし。浦風荒れて松のひびきすごく、浪いとたかし。……」
 - 富士紀行(飛鳥井雅世・十五世紀前半)
「高師と、申すも此のあたりにてやと見えて富士のねに及ばぬ名のみ高師山、高しみるも麓なるらし、……」

この高師山を越えて往来する旅人たちの中には、旅の苦勞のありさまとともに、この地の自然のようすや人々のくらしの一端を、歌や紀行文に書き残してくれた有名な人物が数多くいる。

その歌や紀行文の一句一文を見てみると、この高師山は、松のしげる小高い丘で、海から登る坂道は旅人を苦しめたようである。しかし、松林を通る時、せみの声や鹿の鳴き声になぐさめられたかもしれない。いずれにせよ、旅をする人々にとって印象に残る土地であったようである。

また、この地の人々のくらしについても、農業のかたわら焼きものをつくり、舟運あるいは漁業を営み、製塩の仕事をしてもらっていたようすを、旅の感動とともに、今の私たちに紹介してくれている。

2 江戸時代の郷土のようす

(1) 藤並新田の開発

江戸時代、幕府は農業に最も力を注ぎ収入の増加を図ったので、全国各地で新田開発が盛んに行われるようになった。ここ高師村でも、芦原新田や藤並新田などの新田が開発された。



平成18年の藤並新田の写真

藤並新田は、現在の藤並町の南方、梅田川ぞいが開発されたものであり、記録によると

1668年で、新田石高四十石五斗一升四合となっている。しかし、どのような人々が、どういう事情で開発したのかは資料もなく不明なことが多い。ただ、藤並町の氏神、進雄神社(天王様)の由緒から、尾張の島津地方と深い関係がうかがえ、藤並の人々の祖先は、津島地方から移住してきて、新田開発を行ったのであろうと考えられる。

(2) 高足村の人々のくらし

江戸時代を通じて高足村の人々は、吉田藩の支配下にあった。そして、郡奉行のもとで村方三役(庄屋・組頭・百姓代)を通して治められていた。そうしたことは、当時、どこの地方も同じようであった。

村民は、五人組制のもとに、租税を納めさせられ、犯罪防止のためやお触れ書きの徹底のために、つねに連帯責任をおわされていたのである。

このような立場におかれた村民は、いつも貧しい生活であった。租税の重さに加えて、二川宿への助郷役としてかり出される労役の負担も大きかったという。したがって、村には、お茶も飲めないような貧しい農家が多かった。

このような世相の中、1769年18歳の時、村民に推されて庄屋となり、1775年25歳の若さで亡くなるまで、村民のため命を張って減租に努めた義人庄屋源吉の話が残っているのもうなずけよう。

(3) たかしの地名の由来

幸校区の多くの地域が、近年まで高師原、即ち高師村(町)にそのほとんどが含まれていた。高師の地名の由来は、大化(645年)の頃の記録に「高芦郷」の文字が見られ、平安時代の「倭名類聚鈔」に「渥美郡・高蘆郷」の名が記されているところから、古来より一

つの集落として発展していたことがうかがえる。

中世になると伊勢神宮の文書「高足御厨」と記され神宮の領地の一つであった。その後、高足郷となり、江戸時代から昭和7年までの長い間、高師村と呼ばれてきた。

このように地名に当てられた字は、時代とともに変わってはいるが、「たかし」という呼び方は変わっていない。この「たかし」の名称は、古代に梅田川付近にいた豪族「高須賀の別」という人名に由来するものといわれている。

3 軍都・豊橋と高師原

(1) 明治のころの高師原

起伏に富んで広がる高師原は、藤並町史(柴田秀夫編)の記述によると、明治以前は農民が手をつけない荒地であった。その原因は、水の便が悪いことに加えて、耕地を拡大

すれば税の負担が大きくなるためとされている。そのために台地の開拓など思いもよらなかったのである。したがって、明治の世になっても高師原には住む人もなく、土地を管理する人もなかった。周辺に以前から住んでいた人々の集落だけであった。(図2)

このように利用されないままの荒地・高師原は、明治40年、陸軍第十五師団が豊橋市に置かれると同時に、天伯原とともに演習地として国に買収され、陸軍兵士の演習地となって利用されることとなったのである。

(2) 大正のころの高師原

陸軍第十五師団の演習地となった高師原は訓練の場として着々と整えられていき、一般の人々の立ち入れない土地となった。次の地図(図3)は、陸軍が大正13年に測量して作ったもので、昭和に入ってもここでの演習がつづいた。当時の高師原演習地のようすを知るのに貴重な資料となる。

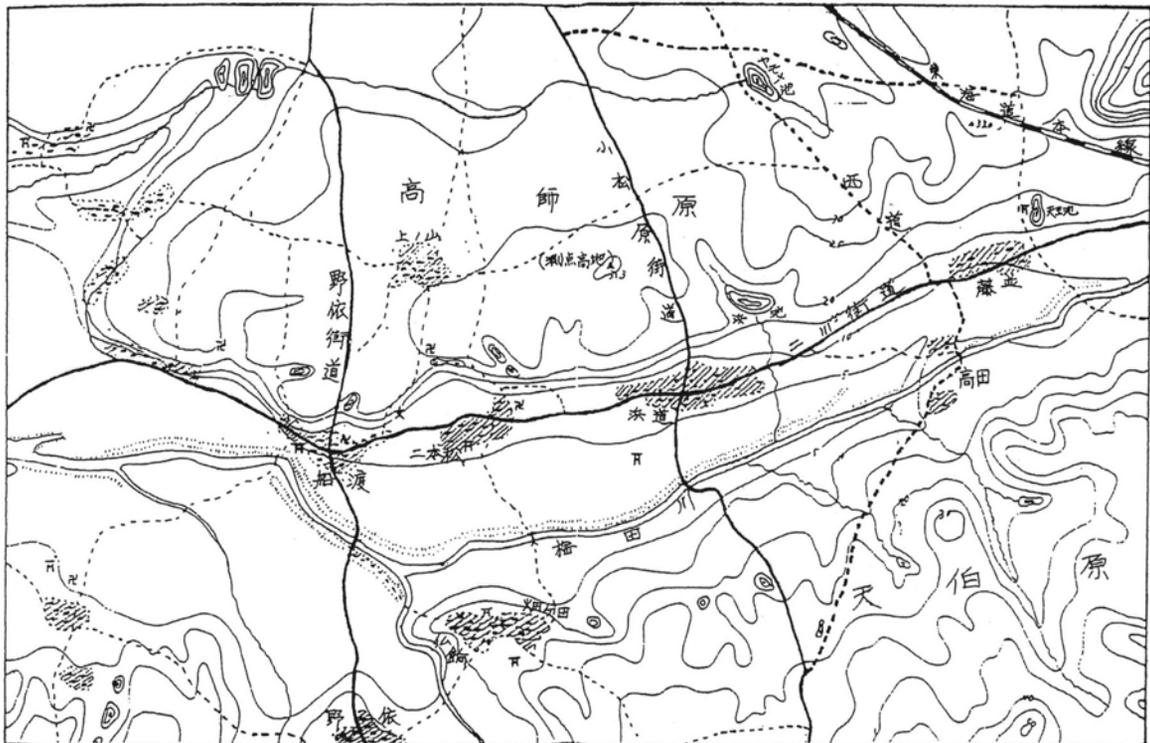


図2 明治21年ごろの高師原付近

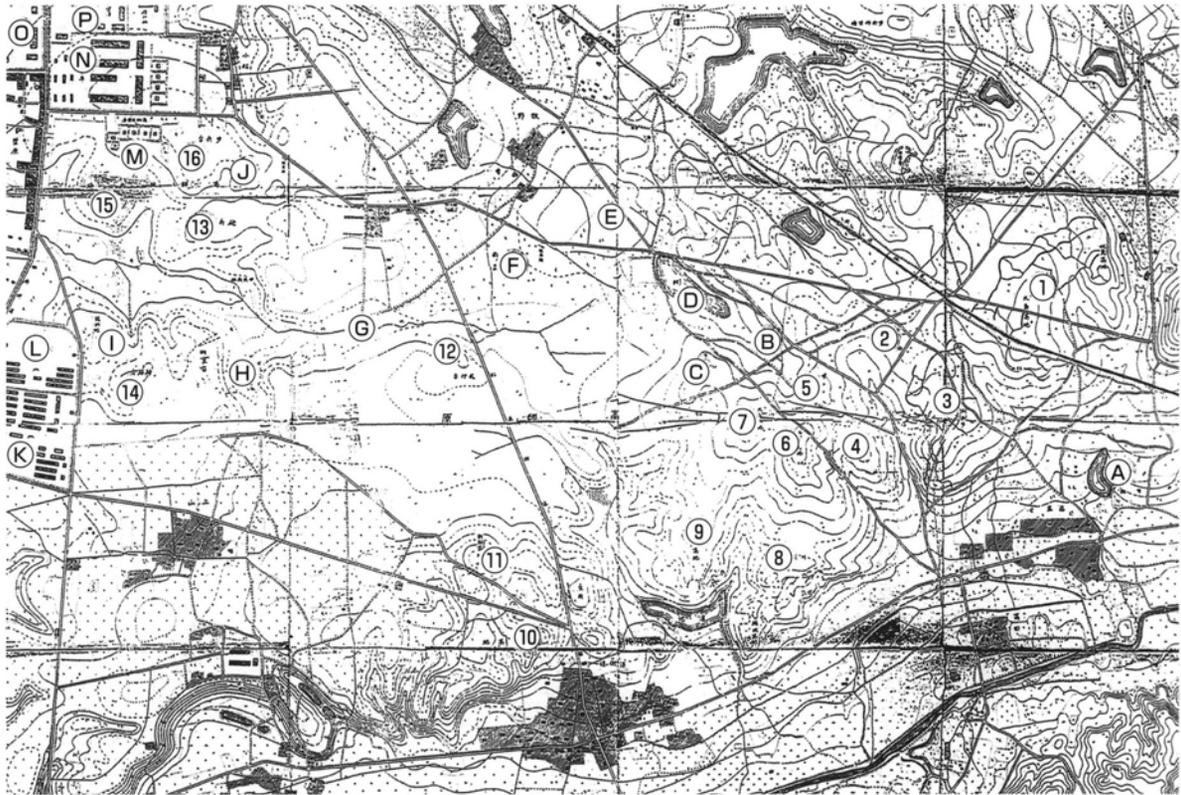


図3 大正13年 陸軍測量による高師原の地図

記号	演習地内の名称	記号	演習地内の名称	記号	演習地内の名称	記号	演習地内の名称
1	大島高地	9	小室高地	A	天王池	I	観測松
2	戸川高地	10	八木高地	B	大松(トビの巣松)	J	樟並松
3	工兵台	11	測点高地	C	笠松	K	廠舎
4	中台	12	飛行台	D	ヤモメ池(清水池)	L	秣倉庫
5	歩兵台	13	砲兵台	E	川崎森林	M	火薬庫
6	三ヶ月高地	14	蹄跡台	F	南ノ森	N	兵器倉庫
7	大松高地	15	騎兵台	G	水無川	O	砲兵営
8	川見台	16	歩兵台	H	七本松	P	経理部倉庫

(3) 昭和の高師原

陸軍第十五師団の大演習地となった高師原では、おもに騎兵部隊の訓練が展開されてきた。しかし、大正14年、軍縮のため十五師団が廃止され、代って第三師団の演習地となり、士官学校や高射砲連隊などが置かれることになった。そして、高師原と天伯原には、砲声のとどろく日々が多くなったのである。

この演習のため、演習地内に耕地を持つ農家の人々は、軍の演習予定に従って農作業をしなければならず、たいへん苦勞したという。

このような高師原の演習地に、大正・昭和にかけて天皇陛下が、観兵のため行幸している。このことは、幸校区の地名の由来に関わるできごとであった。

4 高師原の開拓

(1) 開拓が始まる

昭和20年（1945）8月、第2次世界大戦が終わった。戦争で国民は貧しくなっており、特に食糧不足は深刻であった。戦争のために、外国へ行っていた軍人もどんどん日本国内に引き揚げてきたが、職を失ってしまった。住む家を焼かれたり、働く場所をなくしたりして、困っている人がおおぜいいた。

国は、この食糧不足を解決することが、もっとも大切なことであると考えた。そこで、国は、県や市と協力してこの広い演習地を開拓し、人々に食糧と働く場所を提供しようと

する緊急開拓事業を決めたのである。

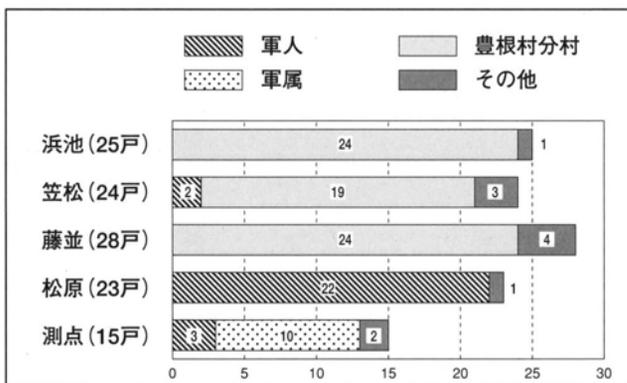
そして、9月になって間もないころ、新しい土地に希望を持つ人々が、この開拓地高師原に集まってきたのである。

ここには、二つの開拓団が結成された。西半分が高師原工区、東半分が岩西工区に分けられた。高師原工区は、現在の測点、松原が、岩西工区には、浜池、笠松、藤並の一部が含まれている。

下のグラフからもわかるように、高師原工区には、主に、戦争中周辺に駐屯していた軍人や軍属が入植し、岩西工区には北設楽郡豊根村の人たちが入植した。そして、それぞれの希望を胸に、開拓を始めたのである。



高師原演習地（西幸・浜池あたり）



昭和20年 入植者の集落別入植組織



開拓者の家

(2) 開拓の苦勞

入植した人々は、当初、予想外の苦しい生活を送らなければならなかった。

開拓の仕事は、でこぼこした荒地を平らな耕地にすることから始まった。それは、たいへんな仕事であった。特に、松の根を掘ったり、荒地を掘り起こしたりする仕事は苦しく、体がふらついたり、目まいがすることもあったという。ほとんどの土地は、入植した人たちの血のにじむようなひと鍬ひと鍬によって開かれていった。

特に、ここの入植者には、20歳から30歳代の家族の増える年代の人たちが多く、食糧不足の苦しみはひとしおであった。食べ物を求めて、衣類や家具類を売ったり、農業をするために国から借りたお金を生活費として使ったりしたようである。

住宅は、農地開発営団幹旋の6坪のセット住宅であった。それは、2部屋しかなく、家族の多い人たちは、寝る場所にも困る状態であった。屋根は薄板で、雨が降るとたちまち壊れ、杉皮を求めて修理したのである。それゆえ、雨期には雨もりに悩み、冬には、雪が舞い込む始末であった。

水道がひかれる前は、飲み水にも不自由した。わずかな沢水や湧き水に頼らなければならなかったのである。電気も昭和27・28年まで引けなかったところがあった。

いくらがんばっても思うように収穫がなく、農業に見切りをつけ、開拓団から離れていく人も少なくなかった。

昭和28年(1953)の13号台風、昭和34年(1959)の伊勢湾台風などの大災害を受けながらも、人々は忍耐強く立ち直っていったのである。農業の経験のない人も多くいたが、農作業にいろいろな工夫を重ねた。また、新しいものをどんどん取り入れていこうとする気持ちも強く、動力耕運機を早くから使う人

もいたという。

私は、戦争中、航空隊に属し家内とともに、あちこちを転々としていました。

豊橋に住んでいた時、空襲(昭和20年6月20日)で家財道具を一遍に失ってしまいました。それでも、先に長沢(宝飯郡)疎開させておいた一部の荷物は助かりました。

そして、8月15日、終戦。航空隊も即、解散でした。長沢に帰っていた時に、陸軍省から、食料増産のため、軍人を優先して、この高師原の開拓をする人の募集がきたわけです。本当は、教員になりたかったのですが、軍人は公職についてはいけないというきまり(昭和26年8月に取り消し)があってなれなかったのです。10月に申し込みをし、11月、12月と開拓のための訓練を受けました。

翌年1月、開拓地の配分がありましたが、なかなか定まらずあちこちに行かされました。家もなく、松原のグライダーの格納庫を借りていました。

開拓者 Iさんの話

入植して5年間ぐらいいは配給がありました。食べれるようなものはできませんでしたから。一人につき米は一日一合の他に、サツマイモを干したものとジャガイモ、カボチャなどが配給されましたが、足りませんでした。当時はお金がなかったので、物々交換でした。でも交換するものがなくて苦勞しました。

水がまだ引けてない頃は、共同で井戸を掘りました。土地が高いから、27尺ぐらいほりましたね。お風呂を作ったときには、近所の人も入りに来ました。笹の根をたたいて乾かしたものをたき物として使いました。子どもたちにも手伝ってもらいました。

開拓者 Kさんの話

(3) 実った努力

開拓当初は、サツマイモを主に植えた。イモは乾燥に強く、やせ地でもなんとか収穫できたからである。昭和21年ごろから、夏はサツマイモ、冬はコムギを作るようになった。開こんも、年間10aから20aぐらいしか進まず、10aあたりの収穫も、初めはコムギ14kg、サツマイモは187kgほどで、自給にもこと欠くほどであった。

酸性の強いやせた土地を何とかしなければならぬと考えた人々は、国や県から融資金や配給を受けて、炭酸カルシウムなどを土地にまいて、土壌改良を進めていった。

また、たい肥作りにも力を入れた。梅田川周辺の草を刈って、たい肥として利用した。そして、家畜を飼い、農耕に利用する他に、牛のふんや、じんあい（ごみ）を集めたり、路上の馬ふんを拾ってきたりして、土地を肥やす努力を行った。

昭和23年（1948）に、このころ既に結成されていた岩西開拓組合は、国鉄と交渉して、二川駅に貨車でじんあいを輸送してもらうことに成功した。名古屋・静岡・浜松方面から運搬されたじんあいをトラックで各農家に分配した。こうした努力のもとに、高師原は野菜作りに適した土地になっていったのである。

この他にも人々は、農業技術を身につける勉強を忘れなかった。昭和31年（1956）に開拓指導所が、西幸町（現在のサイエンスコアから高師台中学校のあたり）に設置され、入植者の農業指導にあたった。昼夜をとわず、ここで技術指導を受けた。新しく農業を始める人々にとっては、たいへん勉強になったところである。また、自らも講習会や研究会を開いて、早く農業になれるよう努力を重ねたのである。

その努力が実り、昭和25年（1950）には、一戸あたりの耕地も、72aにもなり、10aあた

りのコムギの収穫も135kg以上にも増えたのである。

その後、ダイコン・スイカ・なたね・ラッカセイなどの栽培にも力を入れるようになった。また、湧き水を利用しての稲作が行われるようになると、高師原でも、水田が造られていったのである。

昭和30年（1955）ごろになると、スイカやハクサイなどの野菜を共同で出荷するようになり、あちこちで荷を積むトラックがみられた。また、松原あたりは、隣の北山町の影響も受けて、ニワトリを飼う家も多くなってきた。

昭和41年（1966）、豊橋開拓農業協同組合が一つに合併したころは、生活もかなり安定してきて、生産物も、ハクサイ・キャベツ・ダイコン・スイカ・トマトなどと多くなり、収穫も増えてきた。

昭和43年（1968）の豊川用水通水後は、水田も増え、稲作が盛んになってきた。この豊川用水の通水は、開拓地の人々に、大きな夢と希望を与えた大きな出来事であった。

その後、畑作がさらに進んだほかに、昭和50年代に入ると新しくハウス・温室園芸も始められていった。

このころになると、人々の顔にも、余裕がみられるようになったのである。



サツマイモの収穫

(4) 農業を変えた豊川用水

高師原は、水に恵まれない土地であった。水無川が流れていたが、農作業に使えるほどの水量はなく、夏や冬は干害が、しばしば起こるところであった。

水を求める多くの人々の願いがかなって、昭和43年（1968）6月、豊川用水が、着工以来19年、総工費488億円をかけて完成した。

この地域にも、豊川用水の東部幹線水路から水が引かれ、西幸・藤並方面には、待望の水がきたのである。しかし、松原・測点方面は、すでに市街化が進んでいたため、導入計画は中止になってしまった。

この豊川用水の完成は、用水附近の人々の農業経営を一変させた。夏の日照に悩まされてサツマイモぐらいしかできなかった畑作も、トマト・キュウリ・メロン・スイカなどの栽培を盛んにさせ、生産量を増すことを可能にした。冬の水不足で、ダイコン洗いなどに苦労したが、それが容易になり、また、キャベツ・ハクサイなどの栽培にも水の心配がなくなった。

さらに、大きな変化として、水稻の増加がある。用水通水後は、2倍以上の作付け面積にもなり、干害の心配をしなくても、安心して米を作ることができるようになった。

豊川用水のおかげで、高師原は、新しい農業の時代を迎えたといえる。

水不足に悩み、苦労してきた生活も、このころになって、ようやく楽になり、多角的な農業経営をめざすようになったのである。

開拓のあゆみ

昭和	主なできごと
20年	戦争が終わり、軍人、戦災にあった人、農家の人が高師原に入植。
21年	高師原一帯に、高師原工区と岩西工区の開拓団ができる。
23年	でんぶん工場ができる。 たくわん作りが始まる。 高師原開拓組合、岩西開拓組合が結成される。
25年	牛が飼われるようになる。
28年	13号台風で被害をうける。 スイカ・ハクサイ作りが盛んになる。
33年	高師原ではニワトリを、岩西ではブタを飼う人が多くなる。 野菜の共同出荷が行われるようになる。
34年	伊勢湾台風で大きな被害をうける。
35年	ジャガイモ・キャベツ・トマトなどの栽培が盛んになる。
40年	豊川用水一部通水(高師原未通水)
41年	各地区の開拓農協が合併、豊橋開拓農業協同組合となる。
43年	豊川用水が全面通水、高師原にも水がくる。
45年	幸校区に市街化区域ができる。



愛知県開拓指導所（昭和31年）

第2節 発展する幸校区

1 市街化の波

(1) 人口の推移

平成12年の国勢調査によると、幸校区の世帯数は5,516戸で、人口は16,055人である。そのうち、男は8,167人、女は7,888人である。昭和55年の国勢調査の世帯数2,939戸、人口10,767人と比べると大幅に増加している。幸校区のできた昭和52年には、世帯数約2千戸、人口約8千人ほどであった。

校区ができてから市街化区域内の町内を中

心に著しく人口が増加し、住宅数も急増した。現在の人口は、ほぼピークに達し、横ばい状態になっている。

世帯の構成で見ると、昭和45年の世帯の構成人数（平均）が4.37人に対し、平成12年では2.91人となっており、核家族化が進んでいることがわかる。

今後、少子高齢社会がますます進むなかで、ともに支えあうコミュニティの大切さを認識し、災害に強く犯罪のない安全・安心のまちづくりを学校や行政と協力して、自ら創造していくことが求められている。

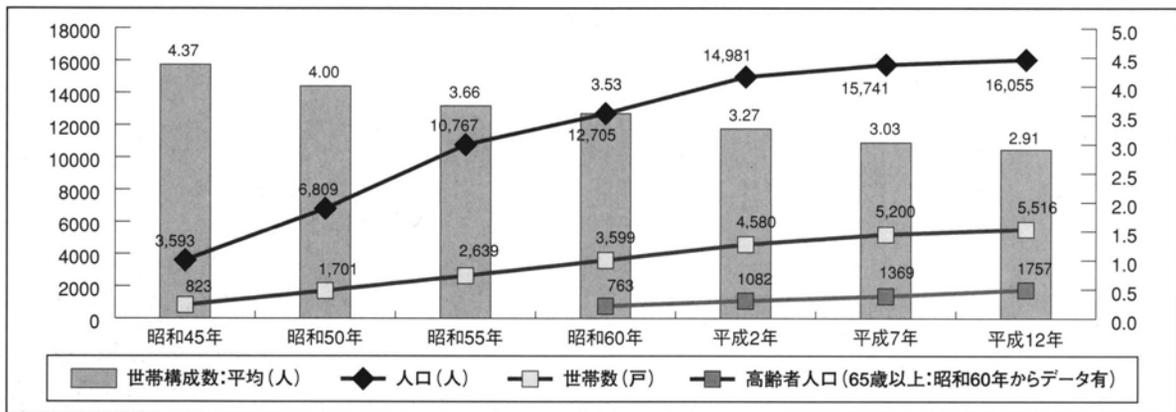
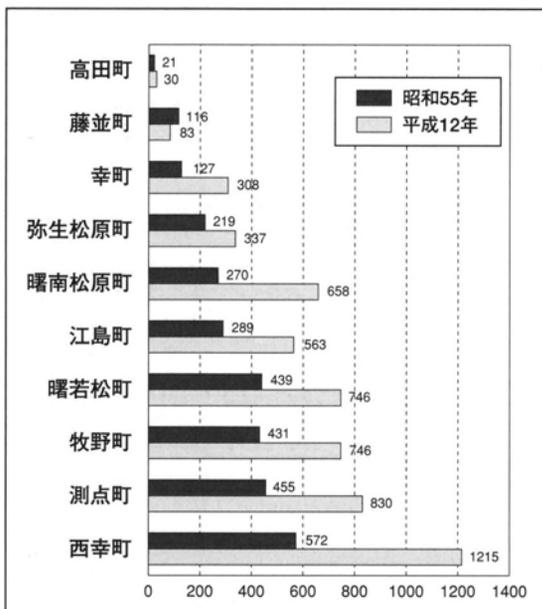
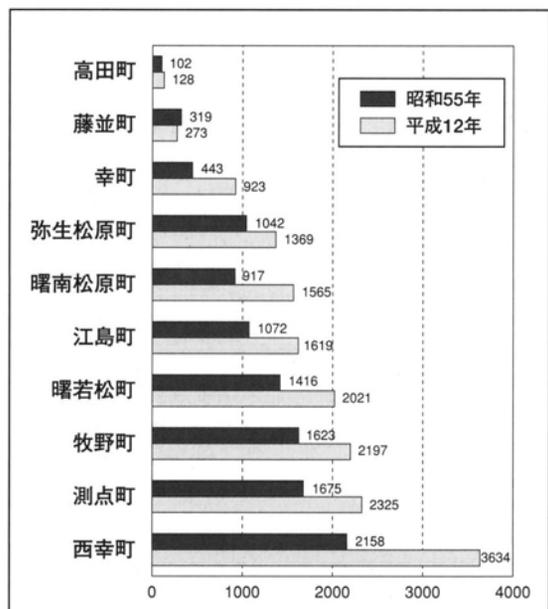


図1 幸校区の人口、世帯数、世帯構成数平均の推移



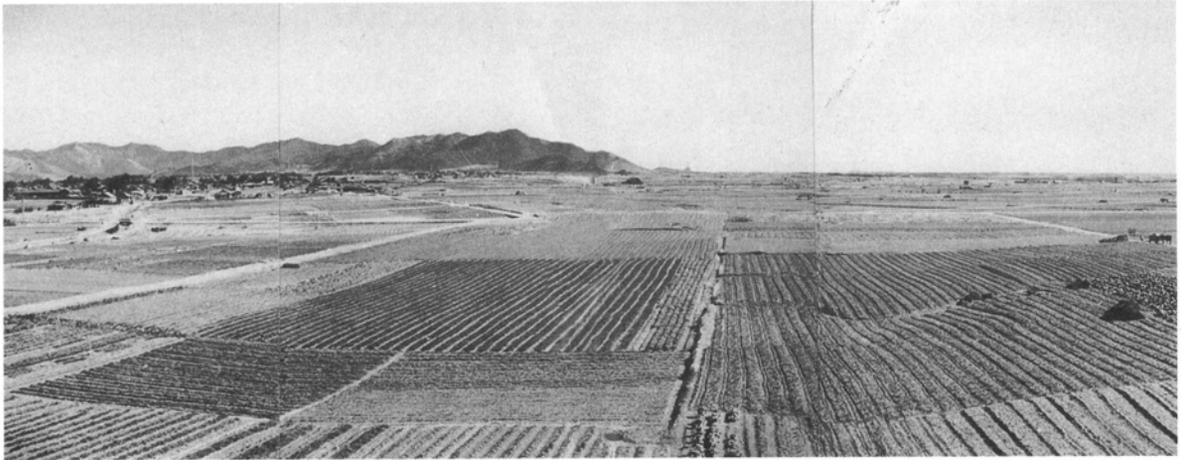
町内別世帯数（町内会ごとの集計）



町内別人口（町内会ごとの集計）

(2) 市街化された高師原

宅地開発が進む高師原のようすを写真で追ってみた。市街化の波がわかる。



昭和26年



昭和50年



平成17年

(3) 町名と字名の成立

現在の幸校区は、昭和7年（1932）9月1日の豊橋市との合併までは、渥美郡高師村大字高師と大字福岡の一部であった。この合併により、牧野町・藤並町・高田町・浜道町（字百々池）が成立し、陸軍演習地であった他のほとんどの地域は、高師町字北原となった。

そして、昭和28年（1953）12月、旧陸軍演習地にまず曙町（字松並）が成立した。さらに昭和32年10月には、西幸町と弥生町が成立した。このとき、字名の浜池・古並・東脇・幸・笠松・測点・南松原・若松・天王ができ、字藤並が確定した。昭和37年11月には、牧野町字松原が弥生町字松原になった。

昭和40年（1965）1月には、江島町が成立し、牧野町が確定した。なお、高師町字小野は町名変更されず、現在に至っている。

現在の町・字名		昭和年月備考
牧野町		7.9.成立 40.1.確定
江島町		40.1.成立 (字なし)
弥生町字松原		32.10.成立(牧野町字松原) 37.11.町名変更
西幸町	字笠松	32.10.成立
	字浜池	
	字古並	
	字幸	
	字東脇	
曙町	字測点	28.12.町成立 (曙町字松並) 32.10.字が成立
	字南松原	
	字若松	
藤並町	字藤並・西側・相生・井島・大沢・八反田・摩耶・天王・新井島・新相生	7.9.成立 32.10.字天王できる 37.8.巢掛沢を廃止 48.6.新井島・新相生できる
高田町	字高田・下地・坪口・斧取・堰上・新下地・新堰上	7.9.成立 48.6.新下地・新堰上できる

(4) 町名と字名の由来

西幸町 昭和2年（1927）の陸軍大演習の際、天皇の幸行があったことにちなみつけられた。（昭和32年成立）

笠松 現在の墓地のところに大きな笠の形をした松があったことによる。

浜池 高師台中学校の南の池にちなむ。

古並 藤並の近くであり、松の並木があったことにもよる。

東脇 西幸町の一番東側に位置するところから東脇という。

幸 岩屋山より展望するために通られた道路（御幸道）にちなむ。

曙町字測点 高師原の高いところに三角点があり、軍隊の観測点になっていた。また、馬の飼料を作っていて、測点耕地（高地）といわれていた。（昭和32年成立）

曙町字南松原・字若松・弥生町字松原

いずれも松に関係する地名である。

栄校区のときには弥生町にはいなかった。幸校区が成立する前の1年間、東弥生町としてやってきたが、町内会としては世帯数が多かったため、3つに分かれた。（昭和32年成立、弥生町字松原は同37年町名変更）

藤並町 津島市に藤波があり、その関係からつけられたといわれている。津島市には、天皇池もある。藤並新田は1668年に開発された。（昭和7年成立）

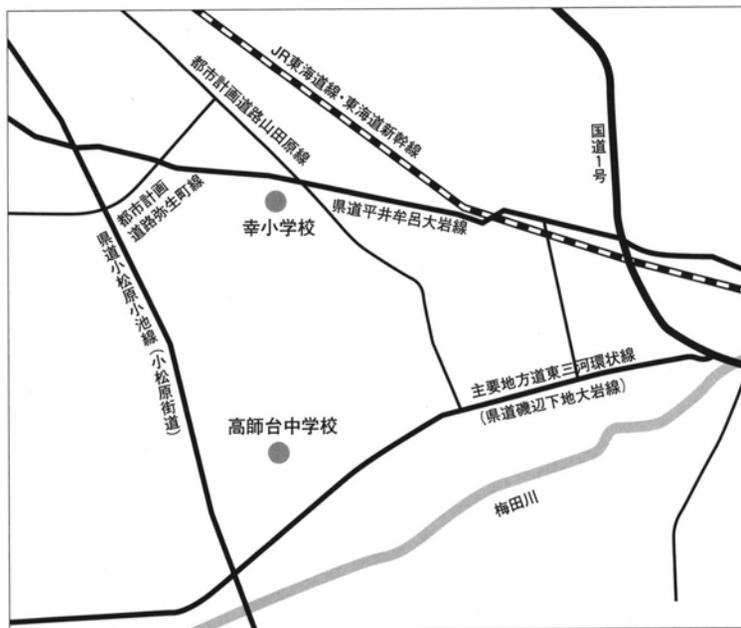
牧野町 昔「牧」という人が土地を持っていて、野原を開墾したことからつけられた。（昭和7年成立、同40年確定）

高田町 高いところの水田という意味であろう。（昭和7年成立）

江島町 旧字名による。（昭和40年成立）

2 交通のようす

(1) 道路のようす



住宅が多い幸校区には、南北に通る県道小松原小池線（小松原街道）と東西に通る県道平井牟呂大岩線、主要地方道東三河環状線を中心とする幹線道路が走っている。また、昭和60年より都市計画道路山田原線、平成8年より都市計画道路弥生町線の整備も進み、東海道本線の踏み切りで交差している市道佐藤町・江島町線が整備されたことにより、幸校区の道路網の整備はさらに進んだ。

これらの道路網の整備は、豊橋市の中心部や他地域と幸校区とを結んでおり、それぞれの所要時間を短縮し、校区の人々の通勤や通学、買い物などに広く利用されている。

その一方、交通量は増加し、特に朝夕のラッシュ時の小松原街道・北山町や東三河環状線・藤並町の交差点付近では、自動車の長い列が見られるようになった。

(2) 道路の歴史

校区を地図で見ると、県道平井牟呂大岩線の北側に細くて曲がりくねった道のある地域

がある。区画整理などが行われていないためではあるが、歩いてみると不思議な楽しさがある。

それに対し南側は、小松原街道に並行したり直行したりして、ちょうど碁盤の目のように整備されている。これは昭和20年から始まった開拓事業の歴史と符合している。当時、車はほとんど利用されていないので、道路といえば県道平井牟呂大岩線、県道小松原小池線、県道磯辺下地大岩線、市道東幸町・藤並町線、市道西幸町・高田町線の5本の通りが道と言える程度であった。

昭和23年、国営豊橋開拓事業所が、将来交差点となるところに杭

を打ち込み、それをもとに失業対策事業として道路工事を行った。そのころは、自動車の必要性などまだ認識されていない時代で、計画された道路のほとんどが、側溝を入れても3間(5.4m)の幅であった。昭和30年ごろに、ほぼ現在のような道路網ができあがり、牛馬や手車に代って自動車が使われ始めた。また、トラックも昭和35年ごろになると個人で所有されるようになった。

道路状況は当時のまま、都市化やモータリゼーションが進んだため、住宅地の中を車が多く走り、校区内の各所で危険な交差点や通



昔の幸校区の道路（市道佐藤町・江島町線）

学路が出現している。

現在、幸校区を通る幹線道路は主要地方道東三河環状線、市道山田原線、市道弥生町線が整備され、小松原街道の拡幅など交通環境は目覚しく進みつつある。

(3) バス路線のようす

校区内には、豊橋鉄道株式会社のバス路線が3本敷かれている。一つは豊橋駅と豊橋技術科学大学、福祉村へつながる豊橋技科大線。もう一つは豊橋駅と三本木、野依町へとつながる三本木線。そして豊橋駅から天伯団地に向かう天伯団地線があり、多くの人々を運んでいる。いずれも豊橋駅まで幸校区からだとして約20～30分と便利で、通勤・通学の交通手段に使われている。

平成18年10月現在、バスの一日の運行は、豊橋技科大線で49往復、三本木線で28.5往復、天伯団地線は14往復となっている。公共交通機関としてのバスをなるべく利用することで、高齢社会に進む時代における市民の移動を支えるバス路線の運行を継続させるとともに、環境に配慮した社会づくりにもつながる



バス路線と停留所

こととなる。

(4) これからの交通環境

道路と公共交通機関はそれぞれの役割を持ち、その機能が発揮できる交通体系の整備が望まれる。

今後、まだまだモータリゼーションが進むと考えられ、道路環境の整備は日常生活上不可欠であるが、一方で、公共交通機関利用者が減少するという悪循環が見え隠れする。公共交通機関は、車を運転できない子どもや高齢者などの人々にとって大事な移動手段であるとともに、車に比べて環境への負荷の少ない移動手段として重要性が高まっている。両者のバランスを保ちながら、より一層の交通体系の充実が期待される。

同時に、生活エリア内での道路としては、生活路線と通過交通路線を分けることが必要で、今後の高齢社会の中で住宅地の交通をより安全なものにするための道路構造上の仕組みや交通環境の整備が安全・安心のまちづくりを進める上で重要となっている。これらのことを進めるには、校区民一人ひとりのまちづくりへの参加や事故などに対する個人個人の安全対策が大切である。



幸小学校区 “ひやり” マップ

3 農業のようす

(1) 幸校区の農業

第一次産業である豊橋市の農業は全国一の農業産出額を誇り、昭和42から平成16年まで日本一となっている。農林水産省の平成16年生産農業所得統計によると豊橋市の平成16年農業産出額は、513.5億円である。

平成12年実施の2000年世界農林業センサスによれば、豊橋市の農家数は5,219戸、その内主業農家数は2,499戸で、全体の農業従事者数は20,025人となっている。なお、経営耕地の総面積は約6,454haと愛知県下で最も広がっている。

特に豊橋市の南部地区は、昭和43年に豊川用水が全面通水して以来、園芸地帯としても発展し、夏はトマト、冬はキャベツなどの生産が多くなっている。また、メロンなど温室による栽培も進んでいる。

豊橋農業協同組合の平成16年度の営農関係での販売高は、177億円を超えている。図1がその内訳であるが、幸校区では、上位品種のキャベツ、ミニトマト、桃太郎トマト、ハクサイ、ラディッシュの生産が盛んとなっている。幸校区の土地利用のようすは図2に示

されたとおりである。

幸校区は、開拓の歴史を持っていることもあり、平成9年までは、次のように町内ごとに豊橋南部農協と豊橋開拓農協に別れて加入していた。現在は、両組合を含む市内5つの農協は合併し、豊橋農業協同組合に一本化されている。

農協名	町名等	
南部農協	福岡支所	牧野町、江島町
	高師支所	藤並町、高田町
開拓農協	高師原支所	曙町若松・南松原・測点、弥生町松原
	岩西支所	西幸町

(2) 地区ごとの農業の特色

① 牧野町、江島町

全域が市街化区域となっており、密集する住宅のすぐ脇に水田が存在する光景が見られる。また、施設園芸や校区外に農地を求め農業を続けている農家もあれば、養鶏農家も存在している。

② 藤並町、高田町

梅田川沿いの比較的水の得やすい地域で、川沿いに水田が広がり、稲作が盛んに行われているほか、夏はスイカ、冬はハクサイなど

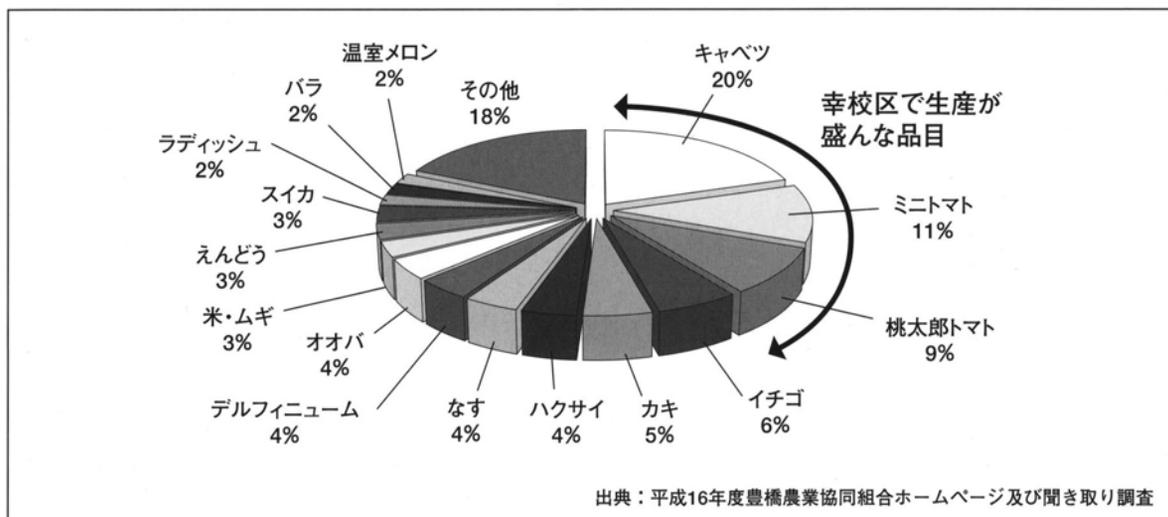


図1 平成16年度豊橋農協取扱上位品目：総額約177億円

が栽培されている。また施設園芸農家も多く、現在、幸校区で最も農業が盛んな地域となっている。

③曙町若松・南松原・測点、弥生町松原

市街化区域に入っており、幸校区内では早くから宅地化が進み、農地は少なくなっている。また、昭和40年代には養鶏業が盛んであったが、現在は飼育されていない。

④西幸町

町の東側を除き市街化区域となっている。市街化調整区域では農業が盛んに続けられており、キャベツ、イチゴなどが栽培されている。

幸校区内には、愛知県経済連の豊橋家畜市場や関連会社のJA東三河GPセンターや愛知県東三河家畜保健衛生所などがあり、畜産関連の事業所も多いことが特色である。特に、豊橋市内のうずら卵の生産は全国一となっており、豊橋養鶏農業協同組合が校区内に存在し、あらゆる農業の面で中核的な位置づけとなっている。



藤並町の畑

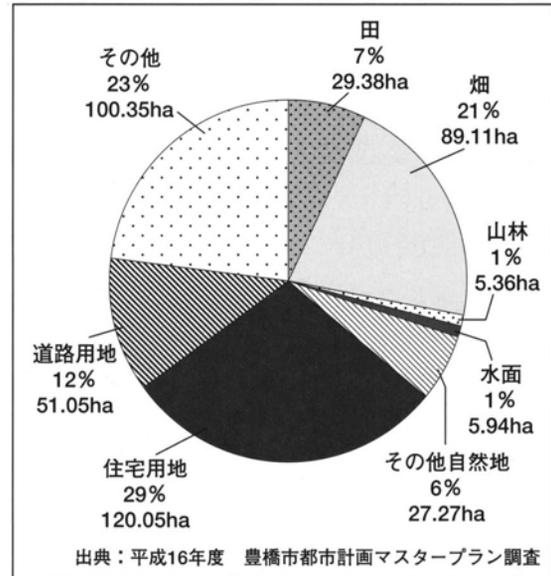


図2 幸校区土地利用の現況

(3) 今後の農業

豊橋市では、農業産出額が30年以上全国1位を続けていたことから、様々な取り組みを行ってきた。特に、近年の無農薬野菜に対する消費者動向の高まりや多肥による環境問題などが注目されつつあり、持続的に生産が確保できる環境保全型農業への転換を推進している。また、輸入農産物との競争激化、農業従事者の高齢化、後継者不足など産業自体が抱える問題、二次的な自然を提供している農地の確保の問題などがある。幸校区の農地面積は年々減少しているが、幸校区内の農家は変化を受け入れながらも、足腰の強い農業へと進化させつつある。

さらに、IT（情報技術）と農業分野が連携した新しい事業展開やシステム化などについて、幸校区にあるサイエンスクリエイト内東三河地域研究センター等と農協、そして豊橋市の農業担当課が中心になって進め、東三河地域が抱える農業分野の問題等を幸校区から解決し、魅力ある農業の創造を発信していくことになろう。

4 工業のようす

(1) 幸校区の工業

豊橋市の第二次産業としての工業は、平成16年工業統計調査結果によると、従業者4人以上の事業所が966あり、従業員数31,752人となっている。製造品出荷額等は約1兆1440億円で、愛知県全体全体の3.11%となっている。事業所の規模では、4～9人の従業者を持つ事業所が最も多く452事業所となっている。産業別事業所数では、食料品産業が最も多く、一般機械産業、金属製品産業、輸送機器産業の順になっている。

その内、幸校区内には、30の事業所があり、従業員数は1,093人となっている。

事業所数では、図1で示すとおり市内52校区中10位となっている。内訳は、従業員が300人以上と100人以上を有する事業所がそれぞれ1事業所ずつ存在するが、10人未満の従業員数の事業所が13事業所で、その約43%を占めている。従業者の校区別構成は、図2のとおり5番目に多くなっている。

製造品出荷額等は約264億5800万円で、豊

橋全体の1兆1440億円の約2.3%となっており、図3に示されたとおり校区別では6位となっている。

業種別では、輸送機器産業、一般機械産業、金属製品産業、プラスチック産業が多い。

図1と2の小学校区別事業所数、従業者数構成比など見ると、幸校区の工場集積の状況がわかる。豊橋市内で、事業所数で10位、従業者数で5位を占める。幸校区は、住宅地として発展してきたが、このように工業も盛んな校区ととらえることもできる。

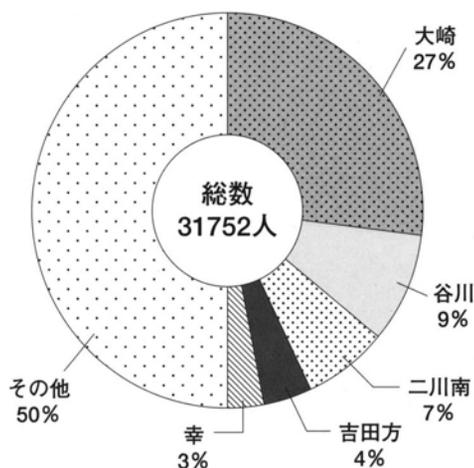


図2 小学校区別従業者構成比

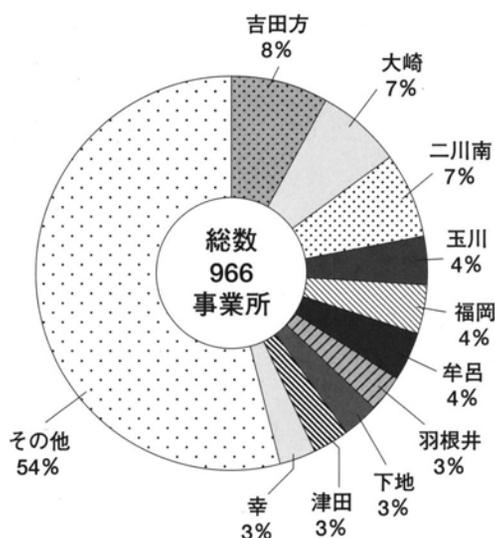


図1 小学校区別事業所数構成比

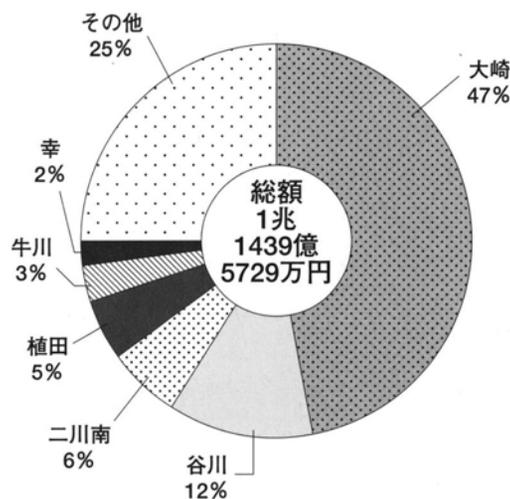


図3 小学校区別製造品出荷額等構成

出典：いずれも平成16年 豊橋市の工業

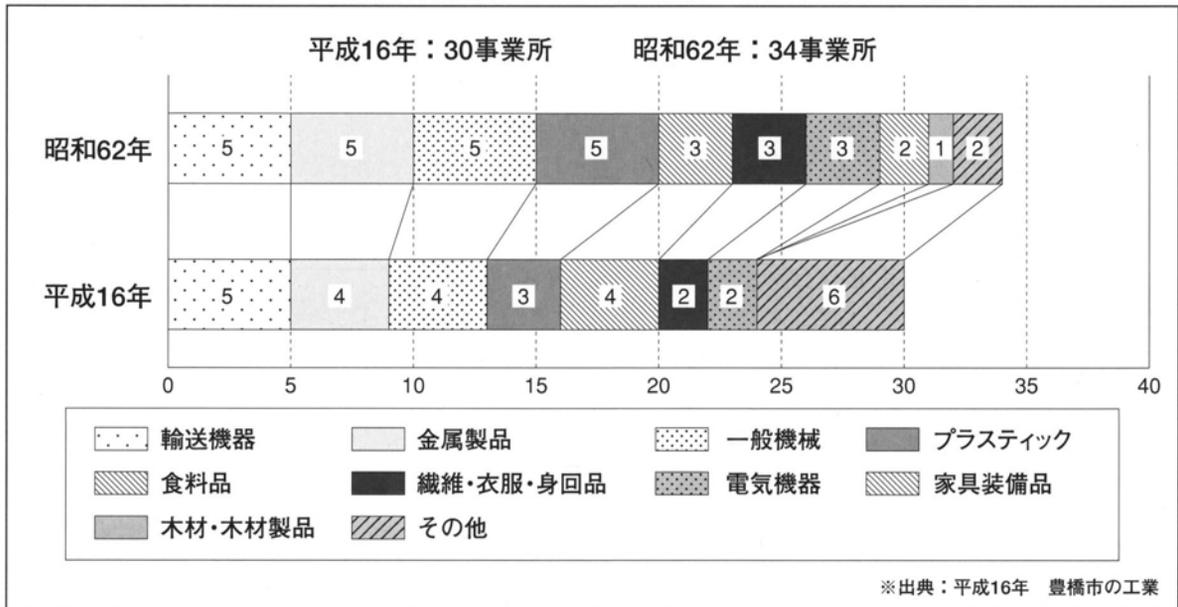


図4 幸校区の事業所の種類

幸校区の工場の種類は、図4にあるように輸送機器、機械・金属製品製造工場、プラスチック工場が昭和62年と同様多いが、全体には、その他の工場が多くなってきている。

特に、幸校区で存在感を持っているのは、昭和37年に進出した大手食品メーカーでISO14001認証取得事業所にもなっている伊藤ハム株式会社豊橋工場と金属プレス加工金

型製作でステンレス深絞り加工という特異の技術をもち、今も産学交流により絶間ない技術革新を進めている株式会社野口製作所である。



伊藤ハム株式会社



野口製作所

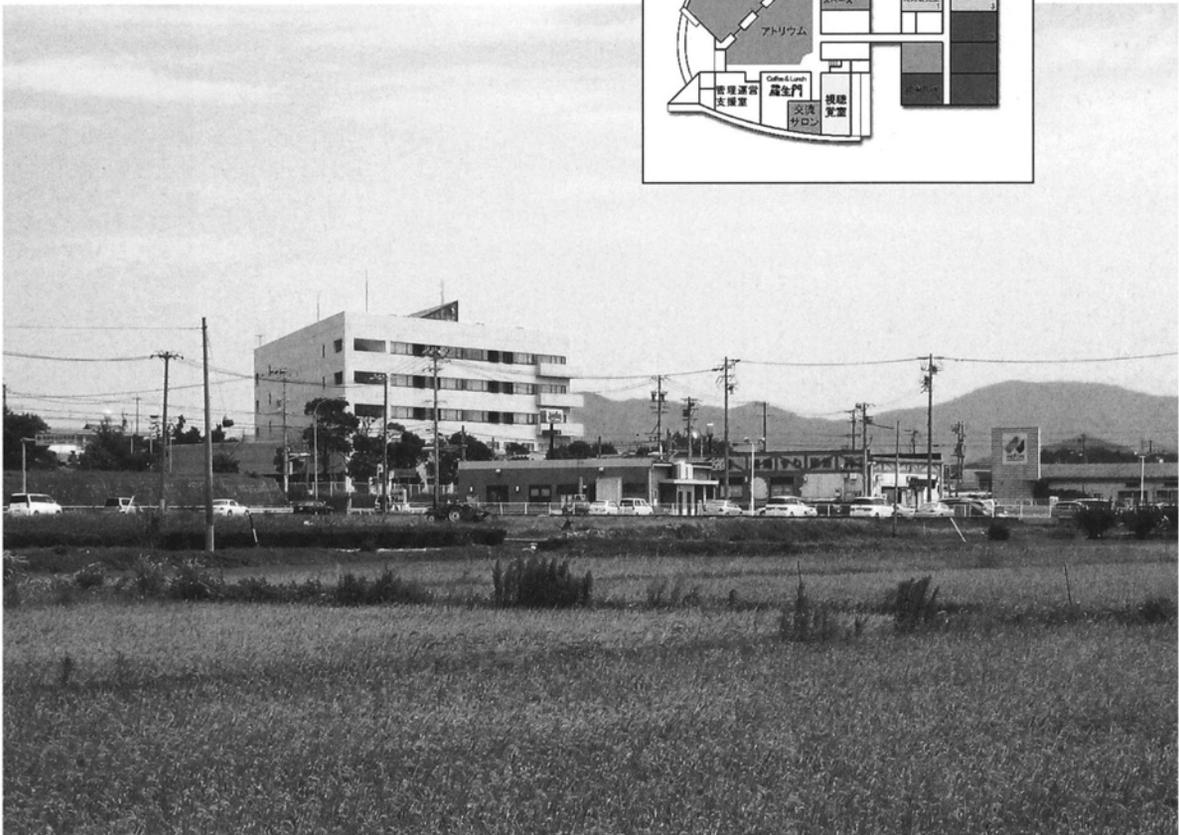
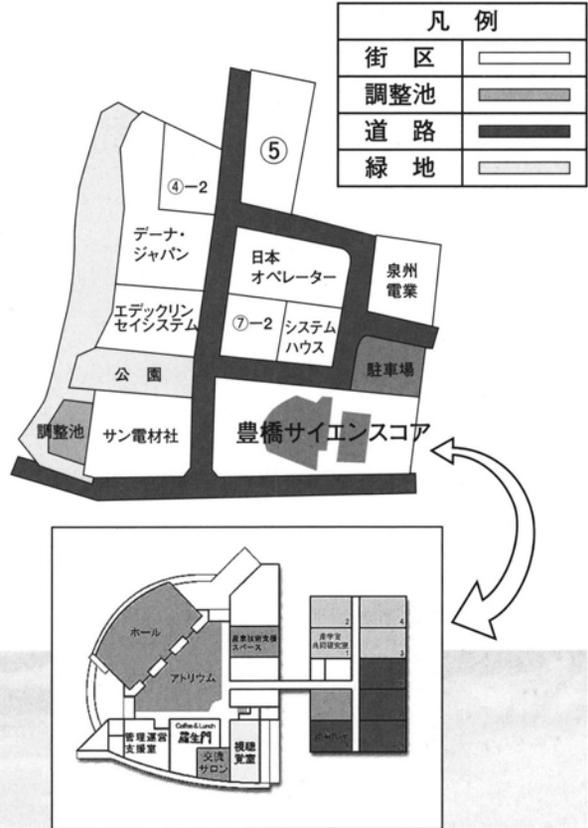
(2) 豊橋リサーチパーク

幸校区のもう一つの大きな特色は、豊橋リサーチパークがあることである。これは豊橋市の産業を将来にわたって発展させていくサイエンスクリエイト21計画を推進するための重要なエリアである。隣接校区の国立大学法人豊橋技術科学大学や本校区内の豊橋サイエンスコアとの連携により、研究開発に重点を置く「新産業創造のための知的産業ゾーン」の形成をめざしている。

そのエリアの核、豊橋サイエンスコアは、サイエンスクリエイト21計画を推進する拠点施設として平成4年に竣工され、地域産業支援機関の株式会社サイエンスクリエイトにより運営されている。

この施設には、中小企業を含めた様々な事業所と研究開発、研究相談、産学官交流研究、起業など、明日の豊橋の産業発展のために、

地域産業の高度化、先端技術への対応を促進している。同時に、人材の育成を積極的に行っており、幸校区がもつ大きな可能性ともいえる。



豊橋サイエンスコアと弓張山地

5 商業のようすと その他のサービス機関

(1) 幸校区の卸売業、小売業

豊橋市の商業は、平成14年商業統計調査結果によると、卸売業または小売業を営む事業所は、4,942事業所で、従業者数は、35,812人となっている。その年間商品販売額は、約1兆1,476億円である。小売業の年間商品販売額は県下第2位となっている。

幸校区には、図1・2に示すように、大規模小売店舗の3店舗を含む127事業所がある。

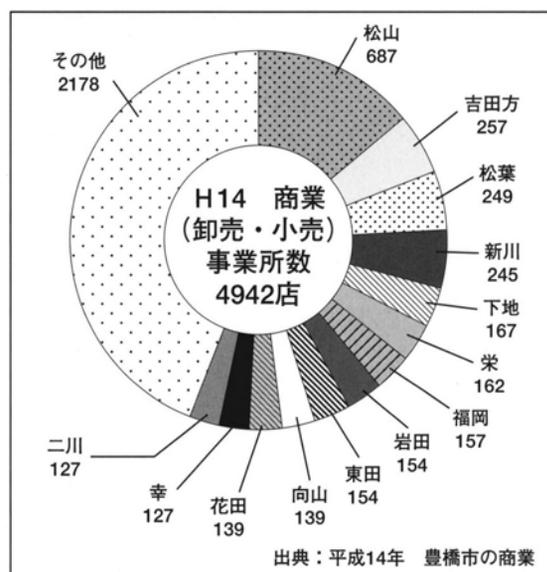


図1 幸校区の商業

その中で、小売業の飲食料品店が最も多く、32店舗、従業者数は862人、内飲食料品店で従業者が多く366人となっている。また、年間商品販売額は約1950万円で、事業所数は、全校区52校区中12位となっている。比較的多くの事業所が校区内に立地していることがわかる。なお、年間商品販売額は18位である。

今日、ライフスタイルの多様化に伴い、日常生活に欠くことのできない存在となってきたコンビニエンスストアも、平成17年1月調べで、豊橋市全体で141店舗ある。その内、幸校区内では7店舗が営業している。

幸校区には、豊橋市の幹線道路である小松原街道（県道小松原小池線）が南北に走り、その沿線に多くの商業店舗がある。また、北山交差点（県道平井牟呂大岩線と県道小松原小池線の交差点）から東側、県道磯辺下地大岩線沿線にも商店が多く存在している。

小松原街道沿いは土地利用計画で沿道型商業区域となっている。道路沿線サービスとして駐車場をもつ比較的大きな店舗が多いが、幸校区の発展の歴史から新しく開発された地域であることもあり、商店街にはなっていない。

しかし、豊橋南部地域の人々が集まりやす

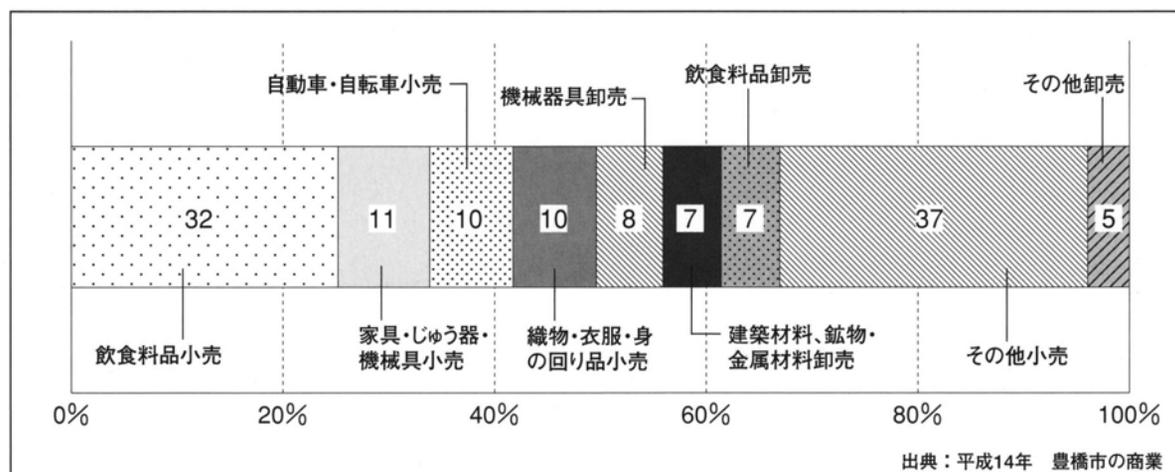


図2 幸校区の卸売、小売事業所数（合計127）

い位置にあること、周辺が密集した住宅地であることなどから、飲食料品小売店が多くなっている。

日常生活での買物は商店街がないこともあり、肉屋、魚屋、八百屋などは少なく、スーパーマーケットを利用することが多い。

スーパーマーケットは校区内に4店舗存在し、その内2店舗が大規模小売店舗となっている。

人々の生活時間が夜遅くまで拡大する中で、深夜営業を行っている店もあり、共働き世帯や近年増加した外国籍市民にもおおいに利用されている。

なお、近隣にもスーパーマーケットや大型スーパーがあり、また近年の道路整備による浜松方面への買い物の利便性が高まる中で、校区内のスーパーマーケットは、多くの人々に愛され営業を続けている。それは、人口密集地域であること、自動車の往来が多い道路沿線にあることに加え、それぞれのスーパーマーケットが地域に密着した営業努力をしていることなどが理由であるといえる。

(2) 幸校区の飲食店

幸校区に卸売、小売商店が多く存在しているのは前述のとおりであるが、年々商店の数が増加している割に商店の種類はあまり変化していない。

最も多いと感じるのは飲食店である。飲食店の数は、統計書である「豊橋の商業」には掲載されていないが、平成13年度の「豊橋の事業所」と平成14年度の「豊橋の商業」から割り出すと、図3に示すとおり大変多く存在していることがわかる。

このことから、幸校区への周辺地域からの集客性の高さがうかがえるとともに、販売能力が高い地域であることがわかり、活発な営業展開が行われている。

しかし、歩道の完備など基盤ともいえる道路環境整備が遅れていることもあり、交通事故など危険を感じることも指摘されている。近年、ようやく道路の整備も進みつつあり、今後も快適な利用ができるように、安全・安心のまちづくりを進めていく必要がある。



県道小松原小池線（小松原街道）

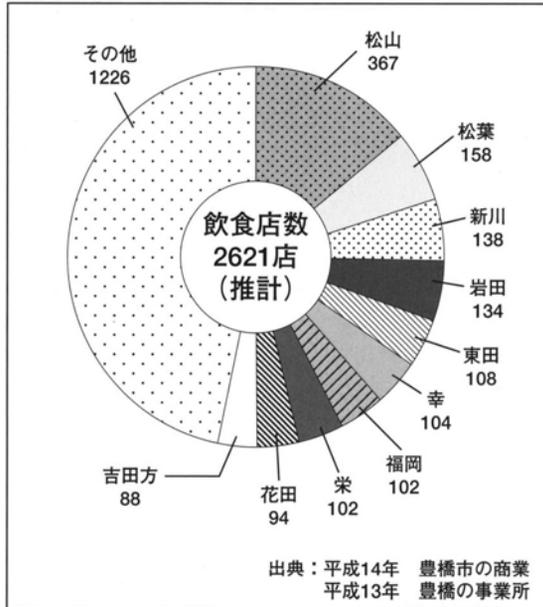


図3 幸校区の飲食業

(3) その他のサービス機関

幸校区は、豊橋市南部にあって、交通上重要な位置にあることから、高師台窓口センターや南消防署を筆頭に生活をしていくうえで大切な役割を果たす機能も多く備わっている。

生活者が便利となる郵便局、信用金庫、農業協同組合やそのATMなどの金融機関施設がそれにあたる。

幸校区の生活上の環境を高めるには、医療機関の存在が重要である。幸校区には一般診療所（内科、心療内科、小児科、産婦人科、眼科など）が10院、歯科診療所4院と多く、少子高齢社会の中で、安心感を高めている。

特に、昭和42年に幸校区に移設した医師会館は臨床検査センター、准看護婦学校を併設し、日々、重要な検査を行うとともに市内の医療機関へのマンパワーを供給している。災害時の救援体制なども整え、本市にとっても欠かせない存在となっている。

また、近年のモータリゼーション社会において、各家庭での自動車保有数が複数になる中で、自動車運転免許証取得が必要な条件となり、幸校区にある専門学校豊橋総合自動車学校が校区を超えて多くの人に利用されている。

このように、幸校区では、住宅街を貫く幹線道路沿いに商店や娯楽店など商業店舗が張り付き、賑わいをつくりだしている。同時に、生活上必要な機関がそろっていることも幸校区の特徴であり、まちの活性化と安心感を高めている。



豊橋医師会 臨床検査センター



豊橋総合自動車学校

第3章 教育と文化

第1節 学校教育・保育

1 保育園、幼稚園

(1) あゆみ

開拓が進み、耕地の交換分合が終わり、各家庭への配分が確定したのは、昭和24年のことである。家族総出で働かなくてはならない状況のなかで、保育所があったら助かるのという声が聞かれるようになってきた。

実現に向けて各方面に働きかけた結果、昭和30年に開拓のために入植した家庭の幼児を中心にして、地元の家庭の幼児も含めて校区で最初の保育園として「高師東保育園」が開園された。



現在の「高師東保育園」

その後、住宅化が進み、人口も増加してきたこの地域に、昭和48年には牧野町のキャベツや白菜畑に囲まれた中に、校区内では最初の幼稚園として「こばと幼稚園」が開園された。



現在の「こばと幼稚園」

昭和52年には、江島町・牧野町の子どもを中心にして、ハス池のあった沼地を埋め立てて「こまどり保育園」が開園された。こうして、私たちの校区では、一つの幼稚園と二つの保育園が小学校入学前の子どもの養育にたずさわるようになった。

その後、ほとんどの農地が住宅や店舗に変わり、サラリーマン家庭、共働き家庭が増加し、就園する子どもの年齢も下がり、保育園では0歳児から受け入れるようになった。こまどり保育園では、保護者のニーズに合わせた各種の特別保育事業を行っている。また、どの園も外国からの就労者の増加にともない外国籍幼児の在籍も珍しくはなくなった。



現在の「こまどり保育園」

3園の園児数の状況（H17.5現在）（単位：人）

	高師東 保育園	こばと 幼稚園	こまどり 保育園	計
0歳児	0	—	3	3
1歳児	17	—	25	42
2歳児	28	—	33	61
3歳児	47	87	51	185
4歳児	39	105	58	202
5歳児	49	87	53	189
計	180	279	223	682

(2) 高師東保育園

① 保育園の目標

- ・あかるく つよく ただしく
- ・こころゆたかに すこやかに

② 保育園の状況

市街化地域に隣接した農業地域に立地しているので自然環境は良好であり、保育園のベランダからは高師原台地が一望できる。近くに豊橋総合動植物公園があり、子どもたちの体力向上もかねて散歩に利用している。また、開園50周年（平成17年）の歴史をもつ保育園である。

③ 特色ある行事

こどもの日、七夕まつり、ひなまつりなど四季折々の行事を行うことによって、その意義を理解させ、親しみをもてるようにしている。

また、豊橋総合動植物公園、南消防署などの近隣施設を見学させ、地域とのつながりに関心を高め、理解を深めようとしている。

(3) こばと幼稚園

① 幼稚園の教育目標

あかるい子、げんきな子、がんばる子

をモットーに幼児期の発達の特徴をふまえ、園生活の中でさまざまな遊びのおもしろさにふれさせ、いろいろな体験を通し、幼児自ら積極的、主体的に活動できる環境を構成し、生きる力の基礎を養う。

② 幼稚園状況

保育園と違って夏休み、冬休み、春休みがある。保育時間は午前8時から午後4時30分までで、平日のみの保育である。

園の伝統的な活動として、年長児によ

る鼓笛隊がある。開園当時より活動を開始し、豊橋祭りのパレードに参加したり、校区の運動会でもその成果を披露したりしている。

③ 特色ある行事

5月始め、年長児を対象に田植えを行っている。農家の田んぼに入り苗を自分の手で植える活動を毎年続けている。また、いものつるさしやいもほりを通して土に親しむ活動や収穫の喜びを味わわせるなど、農業体験を大切にしている。

(4) こまどり保育園

① 保育園の目標

心身ともにたくましく、よく遊ぶ子ども

様々な経験を通して、子どもたちに意欲や自信をもたせるとともに四季折々の行事や自然への関心を高め、心豊かで思いやりのある子どもの育成をめざす。

② 保育園状況

特徴ある活動として次の特別保育事業を実施している。

- ・地域子育て支援活動（こまどりクラブ）の開設
- ・障害児保育指定園
- ・延長保育指定園

③ 特色ある行事

7月には園全体を会場として親子参加の夏祭りを行い、盆踊りや縁日ごっこで楽しいひとときを過ごしている。12月には日本の伝承行事「もちつき」を行っている。年長組が中心になって杵でつき、みんなできな粉や大根で食べ楽しんでいる。元気いっぱいのかげ声がひびく行事である。

2 幸小学校

(1) あゆみ

幸小学校が豊橋市43番目の小学校として誕生したのは、昭和52年4月1日である。

当時、南へ伸びる豊橋の新興住宅地を背景に、児童数が急増した高師・栄・岩西校区を分割してできた小学校である。西幸町の清水池を三分の一ほど埋め立てた用地と、多くの地主の協力により確保された土地に新設され、鉄筋コンクリート造り3階建ての白い校舎が波静かな池の水面にひととき美しく映えた。

校区総代によって準備委員会が設けられ、教育関係者と協議した結果、校名を「幸」と決定した。



学校の中庭に3本の幹を寄せ合うように支えあった一株のクスノキがある。これは、3つの母校から分離してまとまった幸小学校のシンボルとして植えられたものである。豊橋の木である

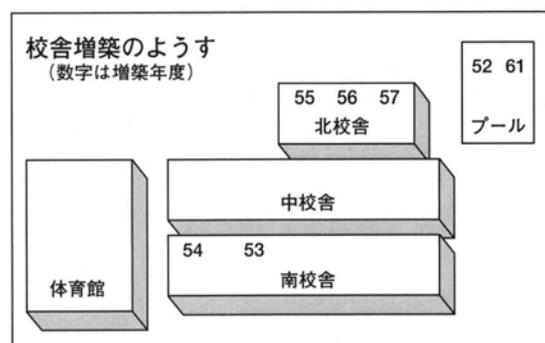
クスノキと、3校の協力の握手が一樹となり、「豊橋の幸」としての創立の決意が、この3本幹の記念樹にこめられている。

児童数893人、23学級でスタートしたが、児童数の急激な増加のため校舎の拡張に次ぐ拡張に追われ、昭和57年まで毎年増築が続けられた。これは、市街化区域編入に伴う宅地化の進展によるものであり、児童数がピークに達したのは昭和58年で、それからは年々減

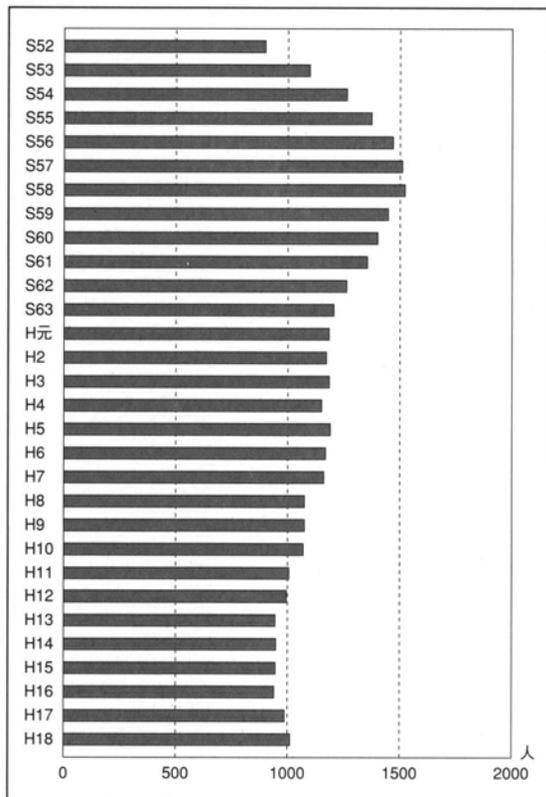
少してきている。しかし学区総人口は増加の一途をたどり、今では豊橋で最多の人口となった。また、外国から多くの就労者が豊橋市に来るようになり、幸校区にも居を構える外国人が増えた。主にブラジル人、アルゼンチン人などである。その子どもたちの増加に伴い平成4年に外国人児童を対象にした国際学級が誕生した。その後、外国人児童の増減により国際学級が開設されない場合は、豊橋市の外国人児童生徒教育相談員の巡回指導を受けている。



開校前の清水池周辺



創立30周年記念航空写真(平成18年)



幸小学校児童数推移表



創立25周年記念で作られた中庭で遊ぶ児童

(2) 教育目標

笑顔あふれる元気な学校

めざす児童像

- ・思いやりのある子 (にこにこ)
- ・進んで学ぶ子 (わくわく)
- ・たくましい子 (ぐんぐん)

(3) 学校の状況

現在、学校周辺の道路が整備され、住宅も増え、児童数も再び、1000人を超えるまでに なった。

登校については、主要箇所ではPTAを中心に交通立ち番を継続している。なお、下校時には不審者からの被害防止や交通事故防止のため総代会をはじめ地域の各種団体の方が協力して子どもたちの安全を見守っている。また、学校では地震災害や不審者の侵入を想定した避難訓練や引き取り訓練、防犯教室などを実施し、非常時に備えている。

身近な清水池は、総合的な学習や生活科の重要な学習教材となっている。「ヘドロで悪臭の漂う清水池」から「生き物や人々が集う自然いっぱいの清水池」をめざし、市の農地整備課の人とともに改修企画に参加し、平成16年3月に改修工事を完了した。



学校サポート委員会

学校のサポート組織として、平成15年度より学校評議員制度（現学校サポート委員会）を導入した。地域・PTA・ボランティア代表の方に委員になってもらい、学校運営について建設的な意見をもらっている。

平成16年度から3年間、豊橋市教育委員会から「学校評価」を課題として研究委嘱を受け研究を進めてきた。2学期制は平成17年度から導入している。これからも、児童・保護者・地域の方の声を聞き、より信頼される学校をめざして、歩みを進めたい。

3 高師台中学校

(1) あゆみ

幸小学校を卒業したあと進学する中学校が「豊橋市立高師台中学校」である。

高師台中学校は、昭和49年4月に市内で17番目の中学校として、開拓指導所の跡地に南部中学校から分離して誕生した。

当初は、高師（幸）・天伯の2小学校区を通学区域とし、600余名でスタートしたが、住宅化が進み10年後には県内でも1、2をあらそう生徒数となり、昭和61年4月に「本郷中学校」が分離して現在に至っている。今では幸・天伯の2小学校区となり、その生徒数の大半が幸小学校の出身者で占められており、いろいろな面で中学校とかかわっている。



創立30周年記念航空写真（平成15年）



活動する生徒

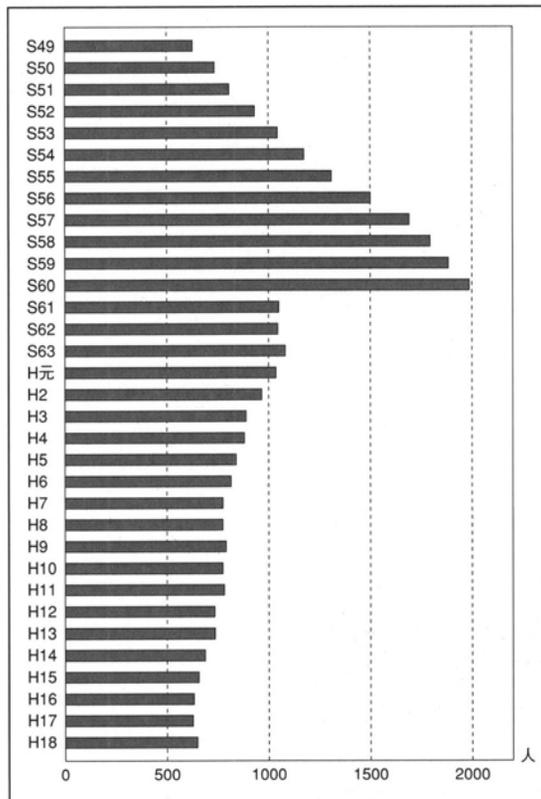
(2) 教育目標

生命を尊び	・おもいやりのある生徒
	・たくましい生徒
	・進んで学習する生徒

(3) 学校の状況

平成14年度、小中学校ともに文科省の方針により、次のような教育制度を中心に新たな取り組みを始めた。

- ・学校5日制の開始
- ・総合的な学習の時間、選択教科の導入



高師台中学校生徒数推移表

平成15年に創立30周年を迎え、全校生徒による航空写真撮影を行った。この年、体育館の全面改修を、さらに平成17年には本館校舎の全面改修が行われた。

現在の学校は、生徒会が中心となった生徒主体の活動を盛んに行っている。特に生徒が生き生きと活動する学校行事に「高師台フェスティバル」がある。毎年、生徒会の企画・運営でおいおいに盛り上がる2日間である。

また、2年生で行われる立志行事を兼ねた「自然教室」（3泊4日）は、生徒の心の成長を促すよい機会となっている。

第2節 史跡や文化財

1 幸校区の史跡

(1) 4つの碑

幸校区の大部分は、昭和20年（1945）に開拓されたため、当時高師原台地に第一歩を踏み入れた人々によって幕が開いたといえる。幸校区に残された碑には開拓時の苦労などをしのばせるものがある。

- ①入植記念碑 昭和25年（1950）4月、開墾後軍用地として買収された土地に、戦後再び入植したことを記念し曙町字測点に建立。将来の機械化耕作に向けた先人たちの努力を私たちに伝えている。
- ②開拓記念碑 昭和40年（1965）12月、岩西開拓団（岩西開拓農業協同組合）が朝日農業賞愛知県代表に選ばれ、開拓の苦労、その苦労が実った後の業績などを子々孫々に伝えるため、御幸神社境内に建立。
- ③藤浪の歌碑 昭和52年（1977）4月、藤並町進雄神社境内に建立。天保2年（1831）12月に大崎城主中島隆功が藤浪を詠んだ歌「たちよりて 見るかげもなし 藤浪の 里の名さへも 冬かれにけり」が正面に刻まれ、裏面には高師学校創設から幸小学校開校までの校区内ようすが略記されている。
- ④和の碑 顕彰碑とも言う。昭和61年（1986）10月、藤並町に生まれた八木一郎氏の業績を称えるため進雄神社境内に建立。



入植記念碑



開拓記念碑



藤浪の歌碑



和の碑

その他に、昭和4年（1929）9月に畜魂碑が、昭和37年（1962）3月に畜魂移転碑が愛知経済連内と蓄場に建てられたが、平成5年（1993）4月、と蓄場の移転とともに明海町に移された。

(2) 様々な史跡

碑以外にも幸校区には数々の史跡が残されている。町名や字名の由来となった史跡も数多い。(30ページ参照) 現存しているものは今後も校区の財産として大切にしていきたい。

⑤**笠松** 第二次世界大戦中は演習地内の目標物の一つにもなっていた松で笠の形状をしていたのでそう呼ばれた。現在の御幸神社墓地内に生えていたが枯死した。字名「笠松」のおこりである。



現在の松並木 (御幸神社墓地南)

⑥**大松** 樹齢300年ほどの松の大木で、御幸神社の境内にあった。市の天然記念物にも指定されたが、笠松と同じようにマツクイムシの被害にあい枯死した。



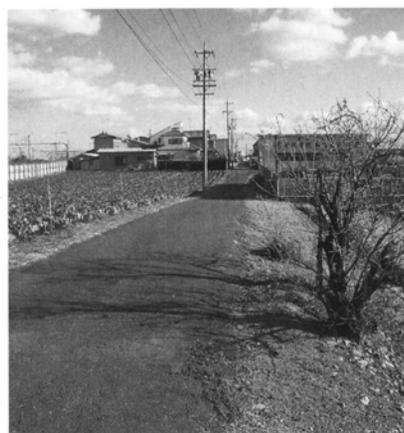
⑦**測点高地** 第二次世界大戦中、陸地測量部が基点とした三角点があったことからこう呼ばれた。高さは31.8メートルと記されている。字名「測点」の名前の由来である。



⑧**三日月 (三ヶ月) 高地** 第二次世界大戦中に陸地測量部が作製した地図によると、幸校区内では最も高い34メートルの高地である。



⑨**御幸道路** 大正7年(1918)に昭和天皇(当時は皇太子)が演習を行啓(ご覧になる)の際に通られた道路。



⑩高師小僧保護区 昭和32年（1957）に、愛知県天然記念物に指定された高師小僧が保護されている。高師台中学校内にある。（9ページ参照）



⑪藤並の庚申塚 二基の石で祭られている珍しい塚。進雄神社内にあり、正徳3年（1713）に建立された。



ために水没した集落の氏神をも合祀して、開拓地の守護神と仰ぎ、集団の精神統一の社として建てられた。現在は西幸町、幸町が氏子となっている。「御幸神社墓地」を管理している全国的にも珍しい神社でもある。多目的集会場を持つ流れ造りの社殿が、平成元年（1989）11月に完成した。例祭日（例大祭）は入植記念日とされている10月10日。



創立当時の御幸神社



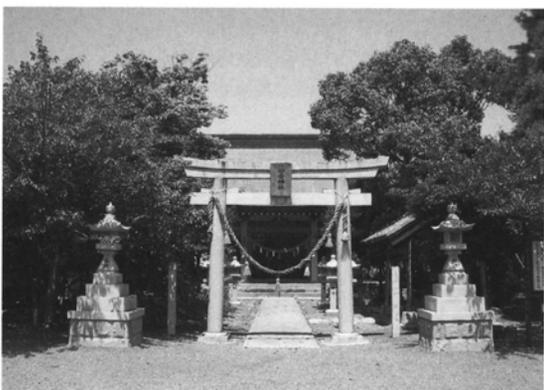
改築前の御幸神社

2 幸校区の文化財

(1) 神社と祭り

私たちの祖先が築き上げ、そして現在まで伝えられてきた数多くの文化には、歴史的・芸術的価値の高いものが数多くある。これらの文化を未来に伝えることは私たちの役割である。

④御幸神社（西幸町鎮座） 昭和24年（1949）11月、三河国一宮砥鹿神社（豊川市一宮町鎮座）の分神を主神として建立された。開拓のために入植した豊根村分村者の各集落の氏神、地元西口町の神社の分神、ダム建設の



現在の御幸神社

御幸神社特殊神事「花祭り」

(豊橋市無形文化財指定)

(豊橋市制90周年記念)

豊橋市文化振興賞受賞)

開拓民が御幸神社を祭った翌年の昭和25年(1950)1月、初めて花祭りが行われた。稲穂に花が咲くようにと五穀豊穡を祈る「花」。来年こそは、と歯を食いしばる開拓民にとって「花」こそが一番身近でふさわしい祭りだった。(開拓については24ページ参照)

当時は祭具が無かったため豊根村から祭り自体を呼んで第1回「花祭り」が開催された。多くの親類縁者が豊根から励ましに来た。イモ酒が振るまわれ、太鼓と笛の音を聞き、舞を舞う。歌楽も舞も幼い頃から体で覚えてきたもの。「花」の伝統が奥三河から豊橋に伝えられた。

佐久間ダムで水没した豊根村分地の津島神社から「花」の面や衣装など花祭りの祭具一式を譲り受けることができ、昭和31年1月18日に御幸神社として第1回「花祭り」を開催した。その後、1月4日を正式な「花祭り」の日に決めた。



舞と神事の概要

十	十	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一
三	二	一									
花	一	順	式	三	嶋	山	神	釜	と	揆	切
の	の	の	さん	丁	祭り	立	迎	抜	う	の	り
舞	舞	舞	ば	鉾		て	へ	い	ご	舞	草
									ば	お	
									やし	ろ	
										し	

二	二	二	二	二	二	十	十	十	十	十
十	十	十	十	十	十	九	八	七	六	五
五	四	三	二	一						
神	し	獅	朝	四	湯	湯	翁	み	柁	山
返	づ	子	鬼	つ	ば	立	み	こ	鬼	見
し	め			舞	やし		摺	摺	舞	鬼
							子	子		
							木			

当初は男性のみに引き継がれてきたこの祭りだが、女子児童たちが「私たちも踊りたい」と言い出したのがきっかけで女子による舞いグループができあがった。また、舞い習いの子どもを送迎していた母親の一人が見よう見まねで笛を吹き始め、2年後にはお囃子の一員になった。参加者が増えた祭りは華やかさを増し、「故郷を思う人の祭り」から「地域に根付いた祭り」に変化をしつつ地域密着の伝統芸能へと大きく育てられている。

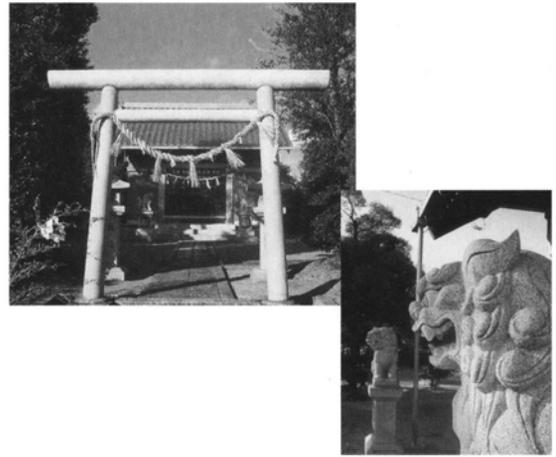
③進雄神社（藤並町鎮座） 祖先是津島地方から移住して新田開発に従事したので、ふる里の氏神である天王を祀り、藤並の鎮主とした。寛文9年（1669）6月創立と伝えられている。境内には碑（46ページ参照）や秋葉神社常夜灯も備えられている。現在も氏子は藤並町。例祭日は10月の第2日曜日。



④牧野神社（牧野町鎮座） 正しくは「正一位秋葉神社」であるが、地域の人々は鎮座している地名をとって「牧野神社」と呼び親しんでいる。牧野地区に入植した人々が、心よりどころとして、現境内すみの道路わきに小さな祠を建立して参拝したのが始まりと伝えられている。現社殿は、昭和29年（1954）に新築された。現在も氏子は牧野町。シンボルは形のよいイチョウとクスノキ。例祭日は10月の第2日曜日、月例祭は毎月第1日曜日。



⑤高田神社（高田町鎮座） 明治40年（1907）ごろ、高師原地域が軍隊の演習地になった時に宝地道地区に居住していた人々が、現高田町に移住し現社殿を造営した。高芦神明社（高師本郷町鎮座）の謠拝所であったともいわれている。平成3年（1991）に新築、阿吽の狛犬が口紅を塗っているのが特色。現在も高田町が氏子。例祭日は10月10日。

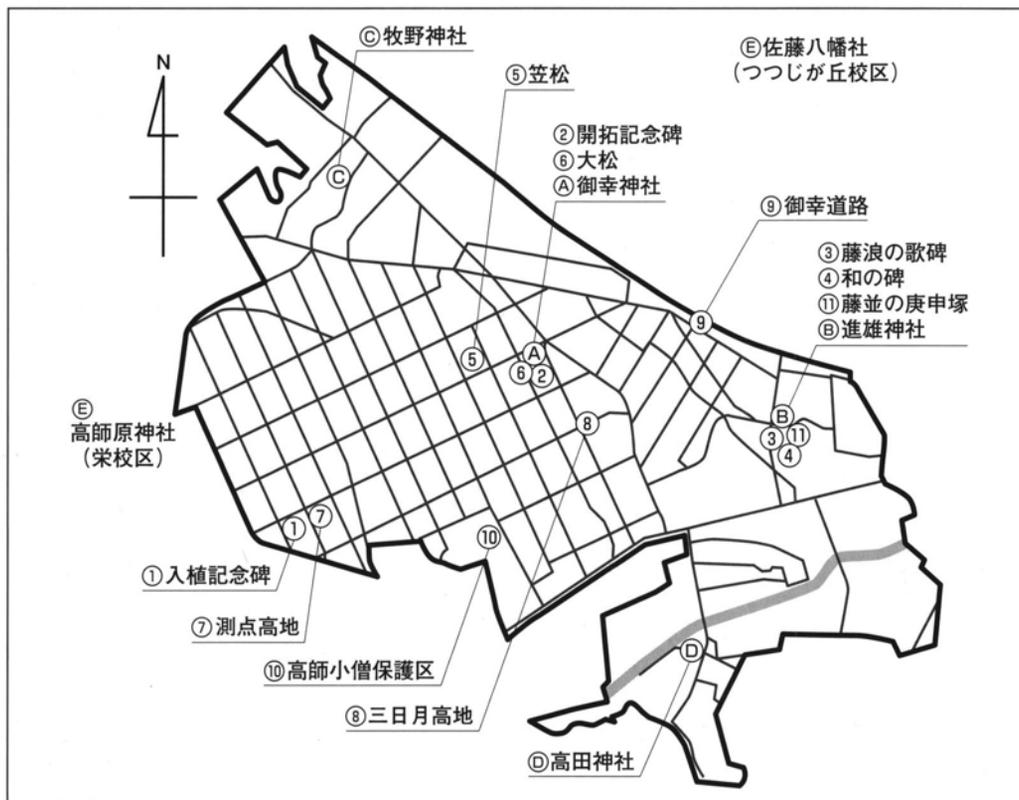


⑥幸校区以外に鎮座する氏神 曙若松町、曙南松原町、弥生松原町、測点町の氏神は栄校区にある「高師原神社」、江島町の氏神は岩西校区にある「佐藤八幡社」である。これらの地区では、従来の「祭礼」という形式から地域住民のコミュニケーションを深めるための「祭典」へ形を変えようと模索中である。



高師原神社

佐藤八幡社



史跡及び文化財地図

(2) 各神社の鎮座地

各神社の氏子、鎮座地は下記表の通りである。区画整理によって、氏神が必ずしも幸校区内にあるわけではない。

神社名	氏子	鎮座地
御幸神社	西幸町 幸町	西幸町字古並240
進雄神社	藤並町	藤並町字藤並88
牧野神社	牧野町	牧野町111
高田神社	高田町	高田町字高田50
高師原神社	曙若松町 曙南松原町 弥生松原町 測点町	弥生町字中原20-1
佐藤八幡社	江島町	佐藤5-22-8



参考文献

- 1 郷土誌ふるさとみゆき 幸小学校編
- 2 高師風土記 高師風土記刊行委員会
- 3 愛知県開拓史 愛知県開拓史研究会編
- 4 幸小学校創立10周年記念誌
10周年記念事業実行委員会
- 5 幸校区創立20周年記念誌
20周年記念事業実行委員会
- 6 藤並町史 柴田秀夫編
- 7 豊橋市医師会史 豊橋市医師会
- 8 豊橋市統計書(平成16年度版) 豊橋市
- 9 豊橋の商工業(2005年度版) 豊橋市
- 10 平成13年豊橋の事業所 豊橋市
- 11 平成14年豊橋市の商業 豊橋市
- 12 平成15年豊橋市の工業 豊橋市
- 13 あいちの農林業(平成13年3月) 愛知県
- 14 豊橋の碑 山田久次
- 15 豊橋男女共生だより「花づな」 豊橋市
- 16 毎日新聞記事(S51.1.8) 毎日新聞社
- 17 豊橋市自然環境保全基礎調査報告書 豊橋市

幸校区史編集委員

高木 繁	齋藤 琇孝	海上 明宏
白井 徳英	奥野 裕己	山田 昭平
中島 伸夫	夏目今朝夫	平岡 久章
八木 立子	鷺坂 浩孝	中井 一之
八木 典彦	渡辺 一充	金子 敦司
荒木 久実	加藤 純子	



編集後記

平成16年11月1日に第1回編集委員会がもたれ、9名の委員で編集のスタートが切られました。

そして、平成17年2月には市のサポーター7名の方に加わっていただき、編集が急速に進みました。

校区史の発刊にあたり、資料収集にご協力くださった方、貴重な資料を提供してくださった方々に厚くお礼申し上げます。限られた頁数のため掲載できず、校区創立30周年記念誌に載せるようにしたものもあります。

この校区史が校区の皆様方にとって、昔を思い、現在を知り、将来を考える一助となれば幸いです。幸校区の限りない発展を期待して編集後記とします。

(委員長 齋藤)

校区のあゆみ 幸

平成18年12月25日発行

編集 幸校区総代会
幸校区史編集委員会
発行 豊橋市総代会
印刷 共和印刷株式会社

R2100
古紙配合率100%の再生紙を
使用しています。

PRINTED WITH
SOY INK
Soybean-based Ink



2006年
市制100周年
100th Anniversary Toyohashi City

つながり ひろがる 未来 豊橋